

2010年度 修士論文

桜・梅の社会文化史

—近世江戸の花の名所に着目して—

Study on socio-cultural history of cherry blossom and ume blossom
-Focusing on showplaces of flower around Edo city of the Edo-period-

古市 真美

Furuichi, Mami

東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

目 次

はじめに	4
第1章 研究の背景と目的	5
1.1 研究の背景	5
1.2 研究の目的	7
第2章 研究の対象と方法	8
2.1 研究の対象	8
2.1.1 対象の花	8
2.1.2 対象地・対象時代	11
2.2 研究の方法	12
第3章 社会的存在としての桜・梅の研究	13
3.1 桜	13
3.2 梅	14
3.3 社会文化史の位置づけ	15
第4章 社会文化史からの整理	16
4.1 桜	16
4.1.1 縄文・弥生時代	16
4.1.2 飛鳥・奈良時代	16
4.1.3 平安時代	17
4.1.4 鎌倉時代	18
4.1.5 室町～桃山時代	19
4.1.6 江戸時代	21
4.1.7 まとめ	22
4.2 梅	23
4.2.1 縄文・弥生時代	23

4.2.2 飛鳥・奈良時代	24
4.2.3 平安時代	26
4.2.4 鎌倉時代	28
4.2.5 室町～桃山時代	30
4.2.6 江戸時代	32
4.2.7 まとめ	32
4.3 花の社会文化史に関する考察	34
第5章 近世江戸における花の名所	37
5.1 近世江戸の花文化・名所の文化の概要	37
5.1.1 花文化概要	37
5.1.2 名所の文化概要	39
5.2 名所の抽出	39
5.3 名所の立地分布と分析方法	41
5.3.1 立地分布	41
5.3.2 分析方法	42
5.4 桜・梅間の比較－江戸市中の花の名所	45
5.4.1 属性	45
5.4.2 魅力要素	46
5.4.3 花の扱い	46
5.4.4 まとめ	48
5.5 桜・梅間の比較－江戸近郊の花の名所	49
5.5.1 属性	49
5.5.2 魅力要素	50
5.5.3 花の扱い	50
5.5.4 まとめ	51

5.6 桜・梅間の比較－江戸遠隔地の花の名所	53
5.6.1 属性	53
5.6.2 魅力要素	54
5.6.3 花の扱い	54
5.6.4 まとめ	56
5.7 花の歴史の実態との関連	57
5.7.1 通底する歴史の実態との関連	57
5.7.2 実際的な歴史の実態との関連	57
第6章 結論と展望	60
謝辞	62
参考文献	63
図表	69
要旨	73

はじめに

「花」とは、古来より人間と深く関わってきた自然の 1 つである。現在ではその“美しさ”という側面が主張し、園芸・庭園・花見といった文化などが主立って注目されていると考えられる。しかし、「花」の利用は多岐にわたり、式典や伝承など様々なところに登場してくるものである。これを踏まえると、実際には「花」とはより多様なものがこめられてきた複雑な存在なのではないだろうか。

現在、環境問題に対する注目と共に、人間と自然との関わりについての研究が多様な分野・手法でなされており、原生自然のみではなく人の手が加えられた二次的自然にも価値が見出されている(内山,1989; 鳥越, 1989 ほか)。二次的自然は人間の社会や文化と密接に関連し育まれてきた自然であり、現在の都市や都市近郊においても存在するものであるといえよう。よってこれらについての研究が進められているが、その歴史の実態については多くの時間をさかのぼって深く触れていくことは少ない。しかし、自然にこめられているものは歴史的に蓄積・醸成されてきたものであり、その上に現在が成り立っている以上、これまでの文脈を無視することは出来ないであろう。以上より、歴史的に自然にこめられてきた意味などといった視点から自然を理解することは、人間が身近な自然を扱うことにおいて必須であると考えられ、「花」についても例外ではないといえるであろう。

第1章

1.1 研究の背景

近年、都市やそこにおける人々を支えるものとして、都市生態系が注目されている。ここでの都市生態系とは、「都市やそれに関わる地域を舞台とした生態系」を指し、人の活動もそのシステムに含んでいる。これは、都市に住む人々に気候調整や、災害に対する避難地など、様々なサービスを与えている。

そして、その都市生態系の1つの装置として、「花のある場所」というものがある。例えば東京においては桜のある上野公園や、梅のある湯島天神などが挙げられ、生態学的な役割や街並み景観への寄与、レクリエーション機能の提供など都市において重要である様々な役割を果たしている。

よって、造園学、生態学、緑地学、植物学など様々な研究分野・観点で「花のある場所」についての研究がおこなわれており、その場所性にとって重要な要素である花に注目したものも多く存在する(久保・長池, 2007; 古賀・斉藤, 2003 など)。しかし、花の種類間の比較など花の種類という枠組みで論じたものは少ない。

また、森林は自然的存在と同時に社会的存在でもある(内山, 1989 ほか)とされることから、森林と同様の自然物である花も社会的存在としての側面も有すると考えられ、それゆえ花はこれまでの歴史で様々な社会・文化と関連・影響し構築されてきた歴史的産物であると考えられる。したがって各花においてこれまで関連してきた、またはその時点で関連している社会文化的要素が異なるため、花の種類によって場所性に及ぼす影響は異なると考えられる。しかし、これを踏まえて場所性を論じる研究は見られない。

これらより、社会文化的要素との関わりの歴史を社会文化史と定義し、社会文化史の視点から花の歴史的実態を捉え、それを踏まえて花の種類という枠組みに着目して「花のある場所」を論じることが必要であると考えられる。具体的には、まずそれが場所性に影響

することを実証すること、どのように影響するかを把握することが必要になってくると考えられる。このような観点で場所を理解することは、その場所における人間と自然との関係、または場所に対する人間と自然との関係をより広い視点で捉えることにつながり、現代の都市における「花のある場所」の意義に対する理解にもつながるであろう。

ここで「社会文化史」についてであるが、近年学際的アプローチなどの観点から注目されて用いられることが多く、「社会文化史」といった名前を冠した学会も存在するものの、明確な定義は提示されていないのが現状である。全体史の追求、学際的アプローチなどの共通する特徴はあるものの様々な種類の切り口が存在している。その基礎となっている「社会史」「文化史」の意味する所や手法も多岐にわたる。よって、本研究においては“花が社会・文化との関わりでどのような文脈でどのように取り上げられ扱われてきたか”に着目し、それについて各花でどのような特徴があるかを把握することを重要であると考えるところから、ここでは“社会文化的要素との関わりの歴史”と定義を行い用いることとする。

1.2 研究の目的

以上を踏まえ、本研究では、

- ① 花を社会文化史から捉え、花の歴史的事態を整理・把握すること
 - ② 以上の結果が花のある場所に関連することを実証し、どのように関連するかを考察すること
- を目的とする。

第2章 研究の対象と方法

2.1 研究の対象

2.1.1 対象の花

本研究では、桜と梅を対象の花とする。桜と梅は古くから日本人と密着に関わってきた花であり、「春来を告げる花木」として、花文化・園芸において代表的な2種とされてきたものであった。それを象徴することとして、御所の紫宸殿といった重要な場所において古代前半までは「左近の梅（または南殿の梅）」が、古代後半以降は「左近の桜（南殿の桜）」が植栽されていたことがある。これらより、様々な社会文化的要素と関連してきたと考えられる。また、花木であるために草本類と比較して場所性との関連が強いと考えられる。また、花を2つ選定した理由としては、花間での比較を行うことによりその花に特徴的な社会文化史の側面と花の種類に依る社会文化史の側面とが把握しやすく、より花の社会文化史における特性が理解しやすいと考えたためである。

以下、生物学的特徴を中心に各花の概要を説明する。

表1 桜・梅の概要対比

	桜	梅
科・属	バラ科サクラ亜科サクラ属	バラ科サクラ亜科アンズ属
日本の花の原産地	日本	中国中南部
開花時期	3月中旬～5月中旬 一斉に咲き、開花時期短い	2～3月 咲いてから散るまでが長い 枝において花がバラバラに咲く

桜は、バラ科サクラ亜科サクラ属に含まれる多数の種や変種、品種の総称である。落葉広葉樹であり、主に北半球の温帯に分布し、日本でも全域に分布している。また陽樹であり、一般的に二次林において生育する。

桜の基本的な形態としては、花弁が一重で 5 枚、がく筒に 5 個のがく片、雌蕊 1 本、雄蕊 30~40 本となっており、両生花である。花序は散形花序または散房花序であり、通常は花が 2~4 個集合して花序を形成している。葉は互生であり、葉身・葉柄・たく葉が揃う完全葉である。樹形は普通丸い樹冠を形成するが、枝が垂れ下がる樹形のもの、枝も花も真っ直ぐに上を向くものなど品種によって様々なものが存在する。

開花時期も様々であり、地域にもよるが、3月中旬~5月中旬といえる。開花期の早いものは葉が展開する前に開花するが、ヤマザクラや園芸品種は葉の展開とともに開花する。また、梅に比べて花が一斉に開花するため、一個体の開花期が短い。

日本産の桜の品種は、大きく野生種、自然雑種、栽培品種の 3 つに分類される。野生種にはヤマザクラ・オオヤマザクラ・オオシマザクラ・カスミザクラ・エドヒガン・マメザクラ・タカネザクラ・チョウジザクラ・ミヤマザクラから、自然雑種・栽培品種はそれらの組み合わせによってそれぞれ構成される。その中でも栽培品種が大部分を占め、それぞれ花弁が一重咲きのもの・八重咲きのもの・菊咲きのもの、花弁の色が濃い紅・淡い紅など、形態や花色まで様々であり、同名異種・異名同種なども含めると 300~400 種とも言われている(永田, 2010)。

なお、花を賞する桜は東洋地方に存在するが、欧米では果実を主として花を従とする西洋実桜が存在する。これはいわゆるチェリーであり、明治時代初期に日本に流入したと言われている。よって現在食用として利用されている桜は日本原産のものではない。

一方、梅はバラ科サクラ亜科アンズ属の落葉広葉樹であり、日本において普及している梅は中国の中南部原産である。古くに日本に渡来してきたとされ、現在では日本全域に栽培植物として分布し、九州地方の一部などには野生化している。

梅の基本的な形態としては、花弁が一重で5枚、がく筒に5個のがく片、雌蕊1本、雄蕊多数となっており、両生花である。また、葉は互生で長さ1cmほどの柄があり、先が長い鋭尖形となる。

開花時期は様々であり、品種・地域にもよるが、概して2月～3月といえる。桜に比べて花が咲き始めてから散るまでの期間が長く、花ごとに開花にもばらつきがあるため、開花時期を長く楽しめる。また、果実は6月頃に熟して黄緑色となり、表面には細毛が密生する。

品種は、果実の収穫を目的とした採果用品種や、花の観賞を目的としたものなど様々なものが存在し、300種類以上の品種があると言われている。採果用品種には豊後・白加賀・南高・花香美・甲州最小などが開発されており、いずれも花色は白色か淡紅色である。

また、梅の果実において、果皮の最も内側にある層である内果皮が丈夫であるため種実が保存されやすく、残存し遺跡で発掘されやすいという特徴がある。

以上のように、桜と梅は近縁である花木同士である一方で、原産地・形態・開花期・品種の特徴など、生物学的特徴に差異が存在するといえる。

2.1.2 対象地・対象時代

対象地・対象時代としては、代表的都市東京の基盤である近世江戸を取り上げる。近世江戸は花文化が大衆化した時代でもあり、これにより花のある場所の成立や大衆化の時点を対象とすることができ、現代の「花のある場所」につながる基礎を見ることができると考えられる。また、多くの都市住民に関わるという理由から、「花のある場所」として花の名所を取り上げることとする。

2.2 研究の方法

まず第 3 章において、これまでの社会的存在として桜・梅を扱う研究・文献を整理し、その中での社会文化史の位置づけを明らかにする。

次に第 4 章において、文献調査によって各花の歴史を社会文化史という視点で捉え直して整理し、花の歴史的事態を把握する。

そして第 5 章において、近世江戸における花の名所において、各花の名所的事態を把握・比較し、歴史的産物としての花的事態との関連を考察する。具体的には、花文化・名所文化が栄えを迎えた近世後期の代表的な名所案内記である『江戸名所図会』『江戸名所花暦』から各花の名所を抽出し、地誌・区史・縁起などの文献や絵図より立地ごとに名所の属性・魅力要素・花の扱いを把握・比較する。そして、それに対して第 4 章の結果を踏まえ、花の歴史的事態との関連を考察する。

最後に第 6 章において、以上を踏まえた結論と展望を示す。

第3章 社会的存在としての桜・梅の研究

3.1 桜

社会的存在としての桜に関しては既に様々な研究が行われている。これは近代における桜に対する賞賛によるものと考えられ、実際に近代においては“日本の国花としての桜”に関する議論が盛んに行われた。しかし、このような研究は軍国主義や国粹主義などのある種の偏見を通した議論となっており、語り口は科学的であるものの、現在において意味するところの科学性に欠ける(斎藤,1980)。よって、これを踏まえて戦後には、科学的に社会的存在としての桜を捉え直す風潮が強まり、更なる桜に関する研究が行われた。以下、戦後の桜に関する研究について述べる。

桜を通史的に捉えたものとしては、永田ら(2010)、有岡(2007)、萩巢(1997)などの概説書や、山田(1990)の国文学から桜の歴史を見たもの、斎藤(1980)の桜の社会科学を提示したものなどがある。特に山田(1990)は桜や桜関連の人文学の古典、斎藤(1980)は桜の社会科学の古典的著作と唱えられ、その後の桜研究に大きく貢献している。しかし、これらは桜の歴史全般に関することを羅列するという枠組みから抜け出せておらず、各社会文化的要素の繋がりや、その要素と花の扱いとの関連などには言及できていない。斎藤(1980)はその言及を目指してはいたもののこれまでの桜に関する情報の紹介にとどまっている。また、飛田(2002)による庭園文化や、白幡(2000)や小野(1992)による花見文化、鳥越(2003)による吉野山を著したものでは社会文化的要素との関連が詳しいが、庭園・花見といったように領域が限られており、全体的な視点に欠ける。社会文化的要素との関連を多角的に見ているものとしては佐藤(2005)や大貫(2003)などがあるが、ソメイヨシノという品種や軍国主義における桜についてなど近代以降に着目しており時代が限定的である。

3.2 梅

社会的存在としての梅に関しては、あまり研究が行われていない。これは日本において社会科学が発達した時代、つまり近代において桜の影に隠れ、桜ほど注目されなかったことが原因として考えられる。しかし、日本人にとってポピュラーな花木であることに違いはなく、一定の文献は存在する。

梅を通史的に捉えたものとしては、有岡(1999)、荻巢(1997)などの概説書があるが、桜のものと同様、これらは梅の歴史全般に関することを羅列したものであり、各社会文化的要素の繋がりや、その要素と花の扱いとの関連などに言及していない。また、飛田(2002)による庭園文化に関するものや、福田(2001)などの菅原道真に関するものでは社会文化的要素との関連が詳しいが、分野が限定的である。

3.3 社会文化史の位置づけ

以上のように、社会的存在としての桜・梅については様々な文献が存在するが、一部の部分のみ、もしくは一部の部分の集合であることがわかる。しかし、花の歴史の実態は様々な方面から、かつ通史的に蓄積されるため、歴史的産物としての花の特徴を把握するにはより全般的な見方が必要である。よって、本研究では社会文化的要素と花の扱いとの関わりを全般的・通史的に整理し、花の歴史の実態を考察する。

一方で、現在用いることができる史資料には限界があることがその既往文献からは読み取れる。また、現在用いられている情報も、近代の桜研究において問題視されていたように何らかの現代的なバイアスが生じている可能性も否定できない。したがって、本研究ではそういった限界性を踏まえながら、現在正しいとされている公理を基礎として現在用いることができる情報を概観することで、社会文化的要素と花の扱いとの関わりを全般的・通史的に整理することとする。そして現代から見た桜と梅の社会文化史の傾向を把握し、花の歴史の実態を考察する。

第4章 社会文化史からの整理

4.1 桜

以下、各時代における桜の扱いの概要を記述し、扱いと社会文化的要素との関連を探る。

4.1.1 縄文・弥生時代

縄文・弥生時代において、桜は山に生育しており、里の中には存在しなかった。しかし、桜は陽樹であり、日当たりのよい二次林でよく生育することから、里に近い山に生育していたことは伺える。民俗学では桜は山や山の神と結びつき、花を山の神に捧げる花供や、山の神が木に降りてくる木としての依代としての扱いが元々分かちがたく存在して、山の神と同一視された祖先・肉親に花をたむける文化が既に存在していたとされている。

4.1.2 飛鳥・奈良時代

飛鳥・奈良時代は、中国から移入した律令政治が進められた時代であり、仏教が伝来した時代である。

飛鳥時代においては縄文・弥生時代と同じく依然桜は山のみ存在しており、中国から流入した漢詩において、山に咲いている桜の存在が詠われるようになった。しかしこの時は感情表現の乏しい、存在のみを詠ったものとなっている。一方、修験道の聖地であった吉野山において、修験道の開祖とされている役小角が本尊である蔵王権現を桜の木に刻み蔵王堂に祀った。この話は作り話である可能性があるともされているが、これが後に吉野山において桜が神木とされる所以となっている。

奈良時代では、天香具山などの山に存在している桜を和歌に詠っていた。(八重桜も詠われ、この頃は既に自然交雑種である八重桜などの狂い咲きの個体もあったことがわかる。)しかし、この頃には依然として桜の存在の単に詠ったものばかりであった。こういった扱

いよりも奈良時代には農事暦・農耕儀礼としての利用に重きが置かれており、たねまき桜と名付けた桜の開花によって農作物の種まきを開始したり、山に足を向けて宴を行う豊穰の祈り・予祝の対象としても用いられていた。また、桜花は土地の神の靈魂を宿した若く栄えあるもののシンボルの 1 つとして、桜の枝葉を折り取って髪や冠にさす挿頭という習慣があった。これにより、人の生命に花の若い生命を移して活気づけ長寿を願ったとされている。そして、そのようなシンボルの花が散ることによって疫病神・悪霊が活動するのを鎮めるという民俗行事が御霊信仰の影響を受け、東大寺では桜会、大神神社の撰社である狭井神社などの神社で鎮花祭が行われるようになり、花が寺や神社を通じて里に流入した。なお、吉野山は地元の豪族が勢力を持っている土地として大和の朝廷にとって重要な存在であり、政治的な価値が見出されていたが、この頃はまだ吉野は桜の象徴とはなっていないかった。

また、万葉の頃から、自宅に居ながら愛でるため家の庭に植え始めていたことが確認されている。万葉集には、屋敷の西北を乾と呼び神聖視する俗信から呪術的な力を有するものとして桜樹が植えられていたことを示す歌群がある。

以上より、飛鳥・奈良時代は、山から里に桜が流入した時代であり、桜の扱いとしては農事暦としての利用が重視されていたほか、行事の対象、和歌の対象、挿頭の対象が挙げられる。関連する社会文化的要素としては、修験道、農業、仏教、神道(御霊信仰)などが挙げられると考えられる。

4.1.3 平安時代

平安時代は、都が平安京に遷り、摂関政治・貴族文化・仏教が栄えた時代である。しかしその後の 1052 年頃以降は摂関政治の衰退・貴族社会の崩壊・武士の台頭・寺院の腐敗の時代であり、末法思想の蔓延などもあって混沌の時代となった。

平安時代では宮中・貴族の庭園や、大通り、神社仏閣に桜は吉野山から多く植栽され、都市の花となった。812 年には嵯峨天皇が神泉苑に御幸して、最初の観桜御会を開いている。

その後、毎年豪華な花見が行われ、平安王朝の行事である「花の宴」「花合わせ」「桜絵」「桜狩り」が宮中や貴族の邸宅のほか、大寺院でも度々催された。漢詩や和歌においても恋の象徴などとして感情が込められたものが詠われるようになった。また、花見は和歌を作る場として「文」の最高に発達した行事であると共に、政治的色彩が濃厚であり、王権のシンボル、貴族の富と権力のシンボルでもあった。御所の紫宸殿の前庭にあった梅が火災で枯れた際には、その跡を桜に植え替え、最上位とされる左側に植えられた(“左近の梅”から“左近の桜”へ)ことから、当時の人々にとって桜が重要な花であったことがうかがえる。

一方、平安時代中期には開祖である役小角の奉じた蔵王権現の神木として桜が尊重されたことから、吉野山は桜の名所として定着しており、それを模した場所が出現した。龜山天皇が嵐山に吉野の桜を移したことがその一例である。

そして、摂関政治が衰退し末法思想が蔓延し始めると、吉野は政治的聖地・ユートピアとして扱われ、天皇・貴族らが中心に信仰していた(吉野信仰)。貴族社会の崩壊や武士の台頭により無常観という思想が流行し、桜を詠う歌においても落花の美や無常を詠うものが増加した。

以上より、平安時代は桜が都市に広まった時代であり、吉野信仰・政治的色彩・末法思想と結びついた時代である。桜の扱いとしては、庭木利用、都市の植栽利用、宴・観賞・文学(恋の象徴、落花の美、無常観の象徴など)の対象が挙げられる。関連する社会文化的要素としては、政治的色彩、王朝文化、都市文化、吉野信仰、末法思想などが挙げられると考えられる。

4.1.4 鎌倉時代

鎌倉時代は、武士政権となり政権が関東に移った時代である。よって関東と関西に2つの都が生じることとなり、文化の中心が二極化した。

まず、公家から武士に花文化が伝播し、鶴岡八幡宮や永福寺など鎌倉の神社仏閣に植栽された。将軍による花見も行われ、鎌倉中の諸堂を廻るほか、三浦半島まで見物に行くこ

ともあった。その際は和歌・連歌が詠まれ管弦が催された。これには武士による京都や王朝文化への憧れがあったとされている。また、都から地方へと花文化が伝播した時代でもある。政治の中心が関東に移ったこと、修験者が各地を修験した際に桜を植栽したことがそれに貢献している。

一方京都では、洛西の勝持寺（花の寺）など、桜の好きな西行法師(1118-1190)ゆかりの桜の名所が増加した。また、後嵯峨天皇による吉野山から嵐山への桜の移植が行われている。

品種に関しては、鎌倉初期に大幅に増加した。これは、政治の中心が京都から関東に移った文化二極化の時代によって、京の桜類と、関東圏のオオシマザクラとが交雑したことによる。この系統は今日サトザクラと呼ばれる一群で、特徴は八重咲きにある。この一系は、鎌倉時代後半から室町時代にかけて12品種が生れた。この頃には桜栽培の技術も進み、実生・挿し木・接ぎ木による繁殖が行われ、里桜系の品種が次々と誕生する。

以上より、鎌倉時代は桜の文化が公家から武士へ、都から地方へ伝播した時代であり、品種が増加した時代であった。桜の扱いとしては平安時代末期と大きな差は見られないが、植栽場所や階層に広がりが生じた。関連した社会文化的要素としては王朝文化、都市文化、吉野信仰、西行法師などが挙げられると考えられる。

4.1.5 室町～桃山時代

室町時代は政権が京都に移り、武家でありながら公家化した足利氏によって文化が醸成された時代である。室町時代前半は公家風・武家風の北山文化からなり、室町時代後半は公家風・武家風・宋元風・庶民文化の融合した東山文化からなる。また室町時代は現代の日本文化の基礎が醸成された時代であるともされている。

まず有名であるのが、花の御所と呼ばれた、将軍の居所の室町殿である。ここには鎌倉を含む全国の桜が持ち込まれ、種々の名桜が数を尽くして集められていた。弘和元年には後園融院の花見の御幸が行われている。他にも公家・武家・禅僧の庭園において植栽され、

公家・将軍によって桜花の遊覧・花見は行われた。また、庶民に花見が広まったのはこの時代であり、祇園・清水・音羽・法輪寺・嵯峨清涼寺などの桜名所が庶民の遊楽の場となっている。

一方、桃山時代では秀吉が平安時代の王朝文化への憧れから、吉野の花見や醍醐の花見を行った。吉野は南北朝の時代以降、目立たない存在となっていたが、これにより花の名所として広範な人々の眼に解放されることとなった。また、醍醐寺は元々修験道の寺であり、当時は真言宗の寺となっていたが、秀吉によって吉野山の再現が行われ桜山へと変えられた。これらにより、吉野山は再び流行していくこととなった。



図1 「醍醐花見図屏風」(部分/国立歴史民俗博物館蔵)

以上より、室町時代は古い王朝文化を基層として新興の武家・貴族によって改めて都市・貴族の花として用いられた時代であり、桃山時代にかけてより広い層へ拡大した。桜の扱いとしては、平安時代末期と大きな差は見られないが、植栽場所や階層に広がりが生じた。関連した社会文化的要素としては王朝文化、都市文化、吉野信仰などが挙げられると考えられる。

4.1.6 江戸時代

江戸時代は、武士・貴族のみならず町人などの庶民がより力を増した時代であり、花文化などが大衆化した時代である。それを受けて品種改良が盛んとなり、様々な品種が産出された。また、江戸・京都・大阪を中心に都市が拡大し、貨幣経済が浸透、商品流通が充実した時代でもある。

まず、江戸時代においては園芸が流行し、武士・町人・寺社の庭園など様々なところで園芸植物が用いられた。その需要を受けて植木屋という存在が出現・台頭し、多数の品種が改良によって作り出され、桜譜という多くの品種が記載されている図鑑や園芸・農業の本が数多く出版された。なお、現在有名なソメイヨシノが産生されたのは江戸の末期である。

また、寺社や高台など様々な場所に植栽され、花の名所となり、その見物に各階層が集まった。そこにおいて、江戸時代では農耕儀礼としての花見と貴族の花見が融合した大衆的な花見が生じ、花の名所において行楽を楽しんだ。時代によって桜の名所には盛衰があり、江戸においては享保の頃には上野、元文の頃には飛鳥山、その後隅田川や小金井村上水の桜が栄えた。

江戸時代中期には歌舞伎で桜がしばしば用いられ、中でも「忠臣蔵」の「花は桜木、人は武士」という台詞は有名である。江戸前期では桜は落花する不吉なものとして武士に嫌われていたとされるが、この“花の一番は桜であり、四民の一番は武士である”という意の台詞で武士と桜が結びつくとされている。また、浮世絵でも桜がよく用いられた。

以上より、江戸時代は古くの王朝文化の桜の扱い方が農民の桜の扱い方と融合し、花文化が大衆化して、桜が都市・民衆の花として定着した時代である。桜の扱いとしては、観賞・文学・絵画の対象が挙げられ、関連する社会文化的要素としては王朝文化、農業、歌舞伎などが挙げられる。

4.1.7 まとめ

関連要素と扱いの関わりの実際的な経緯の主流は以下の通りである。「山にあるもの」としての意義があることから山の神(先祖含む)・生命力・稲と繋がり、やがて修験道の一つである吉野信仰・吉野山と結びつき、政治的聖地となることを通して政治的権力の象徴となった。その結果、都市に広まり主に貴族によって豪華な花見の宴が行われ、富・権威のシンボルとしての価値や審美的価値に重きをおいた貴族・都市の花となった。そしてそれ以降は貴族文化への憧れから、各階層・地域にそういった桜の扱いが伝播した。

一方で、花祭り・灌仏会・桜会等ということから浄土宗・華嚴宗などの仏教、鎮花祭ということから御霊や疫神を鎮める神社、農事暦との関連も有し続け、古くからの生命力としての象徴としての扱いも続いており、これが富・権威や美の象徴としての桜に影響を及ぼし続けている。

以上が桜の歴史の実態である。

4.2 梅

以下、各時代における梅の扱いの概要を記述し、扱いと社会文化的要素との関連を探る。

4.2.1 縄文・弥生時代

縄文・弥生時代では文献史料がほとんど存在していないため、主に考古史料から梅の存在を探ることとなる。弥生時代～古墳時代の遺跡において梅が発掘されたものを以下の表に示す。

表 2 弥生時代～古墳時代における梅が発掘された遺跡(有岡, 1990)

年代	遺跡名	所在地
弥生時代前期	岩田遺跡	山口県平生町
弥生時代前期	亀井遺跡	大阪府八尾市
弥生時代前期	台地遺跡	山口県綾木郷
弥生時代中期	岡山遺跡	山口県熊毛町
弥生時代中期	青野遺跡	京都府綾部市
弥生時代後期	高塚遺跡	奈良県榛原市
弥生時代後期	前川泥炭層	東京都板橋区
古墳時代前期	吹越遺跡	山口県平生町
古墳時代前期	大西遺跡	奈良県桜井市
古墳時代前期	伊布遺跡	愛知県豊田市
古墳時代前期	猫橋遺跡	石川県加賀市

縄文時代の遺跡においては、伊木力遺跡(長崎県西彼杵郡多良見町)の縄文前期から、長さ×幅×厚さ=12.0×11.1×8.4mmの種実が1点産出している。これが発見された1990年

時点では日本で最古の産出例とされているが、数が少ないことなどから栽培されていた確実な証拠とはいえず、縄文前期に梅が存在・栽培されていたことは疑問視されている。よって、弥生時代に中国からの大陸文化の渡来に際して栽培技術と共に果樹として優れた栽培品種が導入されたということが通説となっている。そして、梅は原産地が夏湿気候帯に属していることから、日本の風土によく耐えて栽培が普及したと考えられている。

また、有岡(1993)によると、日本の梅に関してこの時代における唯一の文献史料である『魏志倭人伝』では、梅の説明として「中国原産の落葉高木。実はシソの葉をませ、塩漬物として食用。古くは薬用とされた」と記されている。これらより、弥生時代後期には人々が生活する集落周辺では畑・山麓に梅が植えられ、塩梅や烏梅として用いられていたと考えられている。なお、塩梅とは梅を用いた調味料、烏梅とは未熟な梅の果実を薫製にした薬でのことある。

以上より、縄文・弥生時代では梅は食用・薬用などの実用的なものとして扱われ、それに伴って集落周辺では畑・山麓に植栽されていたとまとめることができる。これらは中国から栽培植物・実用植物としての梅が流入したことが源流として挙げられ、付随する社会文化的要素としては農業を挙げることができるであろう。なお、こういった理由から、梅の品種は一重白梅が主であった。

4.2.2 飛鳥・奈良時代

飛鳥・奈良時代は、中国から移入した律令政治が進められた時代であり、仏教が伝来した時代である。この時代における梅の扱いの種類は、万葉集の時代以前と以後に大きく二分される。

万葉集前の時代では、梅の実用性に依然重きが置かれており、日本最古の漢詩集『懷風藻』では食用としての梅についての詩が存在する。よって、上記の縄文・弥生時代と同じく塩梅・烏梅などの実用的な利用が中心であると共に、中国からの庭園文化の流入から果樹園が形成されていた。

万葉集後の時代においては梅花に目が向けられ始める。日本の歴史的な詩集の中で梅が最も早く登場するのは『懷風藻』における葛野王の「終日鶯梅をはやす」にある。また、文献として成立した年代は遅れるが、梅が詠われた年代が『懷風藻』よりも古いとされている『古今和歌集』の「かな序」に、王仁による「難波津に 咲くやこの花 冬ごもり 今は春べと 咲くやこの花」がある。これらより、梅の花の“春告花”としての側面が当時の知識階級によって認識されていたことが示されているといえる。なお、王仁のこの歌は万葉仮名の習得の入門の役目を果たしていたことから、人々にこの見方が普及していたのではないかと考えられる。

そして万葉集には 117 首の歌が出現し、中国の漢詩をキーとして“梅と雪”“梅と柳”“梅と鶯”などといった後代に梅花と組み合わせるものほとんどすべてが提起されている。これらの組み合わせは“春告花”“白さ”としての梅に関連があり、“春告花”“白さ”としての側面が注目されていたといえる。その中には大宰帥(太宰府長官)大伴旅人の行った梅花の宴における歌が多い。この宴においては、梅花について和歌を詠み、盃に梅花を浮かべ酒と共に飲み干す梅花盃を行っており、宴を行うという文化が日本でも発生していたことが示されている。これは雅という思考が律令と共に取り入れられた結果であり、律令支配層においてこのような梅の扱い方は独占的であった。また、大伴氏は武の氏であったため戦中における重要な食料としての梅に注目しており、中国との繋がりを有していたために梅花を見る文化を取り入れられたのではとされている。

一方で、果実利用も依然行われており、この時代では梅の表記として“宇梅”“烏梅”などがあてられ、観賞していた梅花も果樹園における一重白梅のものであったことから、実用的な梅観の尾をひいているといえる。この根拠として平城京長屋王邸宅における梅の植物遺体群の産出状況がある。また、数少ないながら梅の香りについての詩歌も詠まれ始めた。

以上より、飛鳥・奈良時代では果樹としての実用性に加え、果樹園の構成要素、観賞・宴・和歌の対象(花・実共に)、梅花盃といった扱いが行われたことが分かる。そして、それ

に付随する社会文化的要素としては、農業に加え、中国から流入した雅の文化、庭園文化、武といったものを挙げるができるであろう。

4.2.3 平安時代

平安時代は、都が平安京に遷り、摂関政治・貴族文化・仏教が栄えた時代である。そして1052年頃以降は摂関政治の衰退・貴族社会の崩壊・武士の台頭・寺院の腐敗の時代であり、末法思想の蔓延などもあって混沌の時代となった。

梅は平安時代になると、庭園が定着し、梅が貴族の邸宅の庭木としてしばしば植栽された。梅が庭木にあることはステータスであるとされていたため、競って植栽したと考えられる。場所としては建物近く、建物同士の間にも植栽された。そして梅を觀賞しながらの宴が盛んであり、管弦の遊びと共に和歌が詠われていた。平安時代では梅の香りが賞でることが盛んであり、和歌では多く香りが詠まれたが、依然として鶯や月夜など白さや春告げと関連する詠まれ方も行われていた。また進物など枝折としての活用や、絵画の対象としても用いられていた。

品種としては平安時代の前半までは白梅重視であったが、王朝文化の頃に中国から紅梅が移入し、848年正月に仁明天皇が仁寿殿前に植栽したという『続日本後記』の記録が文献における紅梅の初出となっている。十世紀半ば頃から歌・文章に紅梅が多く見られるようになり、『枕草子』『源氏物語』『大鏡』では紅梅が讚美されている。また、鶯宿梅という紅白の花を咲かせ、香りがよい品種が生まれ有名なものとなった。庭にも紅白といった組み合わせで植栽されることも多く、香りと共に紅白という組み合わせが平安時代で注目されていたと言える。一方で、平安時代は梅の品種分化が進み、“他の者が所有するものと異なったものを持ちたい、みせびらかせたい”という意識を人々がもつようになった時代でもある。

一方、梅が天神の神木となるのもこの時代である。元々中国では梅は“好文木”と呼ばれ、晋の武帝のときの故事をひいてしばしば好文木が物語られており、『十訓抄』第六では

「唐国の帝、文を好み給ひければ開き、学問怠り給へば散りしをれける梅は有りける。好文木とぞ云ひける」という記述がある。それを踏まえて、勉学に励む人々が住み学ぶ場所である局に植栽されており、菅原道真是梅を好んでいたと言われている。菅原道真是文章博士・右大臣などの政治的な要職についていた政治家・学者・文人であり、様々な政治的成果や文学作品を残しているが、左大臣藤原時平に讒訴され大宰府に左遷された。その出発に際して「東風吹かばにほひおこせよ梅のはな あるしなしとて春をわするな」と詠い、更に「梅のはなぬしをわすれぬ物ならば 吹きこん風そことづてもせん」と詠ったことにより、道真の賞でた梅が筑紫に飛んでいったとする飛梅伝説が生まれたとされている(その伝説の元となったとされる“飛梅”は現在も神木として太宰府天満宮に存在している)。そして、道真の死後、藤原時平が延喜9年に39歳の若さで死んだのをはじめ、京都では落雷、早魃、暴風雨、大彗星の出現などの天変や災奇がしきりにおこった。『日本紀略』の延長元(923)年三月二十一日の条では、これらは道真の怨霊のたたりであると世の人々がいつていたことが記されている。この頃は藤原氏による摂関政治が発展していく途上であり、そのため排斥される政治的敗残者は極めて多く怨霊となる数は増えるばかりであったとされ、御霊信仰という「人々を脅かすような天災や疫病の発生を、怨みを持って死んだり非業の死を遂げた人間の「怨霊」のしわざと見なして畏怖し、これを鎮めて「御霊」とすることにより祟りを免れ、平穏と繁栄を実現しようとする日本の信仰」が盛んであった。道真もそのような「怨霊」の一つとされ、延長元(923)年四月二十日には道真の魂を沈めようとして左遷以前の官に復すと共に正二位を追贈したが、同年六月には保明親王の子で仁善子を母とする慶頼王が五歳で死去し、延長八年の夏には早魃が続いて六月二十六日に宮中の清涼殿での雨乞いについての会議中ににわかに来た山で発生した雷雲が北野を通り、御所の上に至って落雷して大納言藤原清貫と右中弁平希世らがこのため死去した。ここで早魃を救うべき雷神が落雷で人を死なすという災厄をもたらしたことから道真の怨霊が雷神と、つまり天神と結びついて説かれるようになった。そして、天神信仰と梅が繋がり、梅は天神信仰の神木となっていった。また、『北野天神縁起』によれば、942年西京に住む多治比

文子に北野右近に祀れとの託宣が、一方同時期に近江国比良宮の神人の神良種の子供に“我が宿るところは必ず松を植えるべし”という託宣があったことから、道真は北野天神に祀られ、松は梅と共に天神の神木になった。



図2 太宰府天満宮(大宰府観光協会より転載、右側の花木が飛梅)

また、平安時代末期の武士が台頭する時代になると、武士の非常食・戦の際の縁起物として用いられた。梅干しとしての利用も平安時代に登場している。

このように、奈良時代から平安時代になって唐文明への傾倒がさめてくると、日本らしい梅の観賞眼・梅観が育ってきたと言える。扱いとしては、庭木利用(ステータスの象徴)、観賞・和歌・宴・枝折の対象(白梅から紅梅・紅白・香りへ)、天神信仰の神木がある。一方、関連する社会文化的要素としては、雅の文化、庭園文化、学問、菅原道真、御霊信仰、天神信仰、武などが挙げられると考えられる。

4.2.4 鎌倉時代

鎌倉時代は、武士政権となり政権が関東に移った時代である。よって関東と関西に2つ

の都が生じることとなった。

鎌倉時代に入ると時代が安定し、北野天神の本来有する雷神・怨霊・疫災といった荒ぶる神の側面が無視され、祭神である菅原道真の文人・詩聖としての一面が意識・強調されるようになった。よって北野天神は文道の太祖・風月の神として信仰されるようになり、和歌の神とされ、1194年には当時流行した連歌の形式で託宣が行われた。神託連歌の発句は神木である梅が吟じられている。また、鎌倉時代中期から末期にかけて、冤罪を救う神として利生をしめし、ついでいかなる所願でも一心一向に天神を祈念する者には必ず成就せしむるといふ慈悲救済の神となり、転じて後生をすら助ける絶対慈悲の神となった。このように天神信仰が高まりを見せ、それに伴って貴族のものであった庭木としての梅が普及した。

また、鎌倉時代は農業を基盤とする質素な生活を送っていた武士の政権であり、中国から流入した禅の思想は武士の精神的支柱として支持されたことから、禅を取り巻く様々な精神文化が宋およびその後の元から摂取された。そして白梅は、禅においてその質素さや清らかさ、雪の中で咲くさまなどから悟りの象徴として用いられることが多く、水墨画や五山文学などの絵画作品・文学作品に見られるように禅の観点からの価値が見出されるようになった。水墨画の梅である墨梅や、それに鳥が取り入れられた花鳥画が禅僧の手によって描かれ、礼拝の対象となっていた。しかし鎌倉時代末期の14世紀初め頃になると可翁の図『梅雀図』など、礼拝の対象ではなく絵画鑑賞の対象としての絵画が描かれるようになっていった。また、禅者は梅花に囲まれた家のすまいを理想としており、寺院には梅が植栽され、前者はそれを観賞し悟りについての議論を行った。

以上より、梅の扱いとしては、これまでの扱いに加えて庭木利用(高い地位以外にも普及)、観賞・文学・絵画の対象(元々のものに加え禅的な観賞・文学・絵画、連歌)があることが分かる。一方、関連した社会文化的要素としては、武、天神信仰、禅の思想があると考えられる。

4.2.5 室町～桃山時代

室町時代は政権が京都に移り、武家でありながら公家化した足利氏によって文化が醸成された時代である。室町時代前半は公家風・武家風の北山文化からなり、室町時代後半は公家文化・武家文化・宋元文化・庶民文化の融合した東山文化からなる。また室町時代は現代の日本文化の基礎が醸成された時代であるともされている。

まず、室町時代初期では、後花園天皇の父君の伏見宮や御所につとめる公家たちは、自らの庭や関係の深い寺などに梅をよく植栽していた。その梅樹は人が栽培していたものに求められ、他家の庭で丹精した成木を掘り取って進物としたものであった。なお、当時は進物として梅樹を贈る場合、清楚な白梅でなく紅白の花が咲きわけしかも薫香のたかい鶯宿梅や、華やかな紅の花をつける紅梅が好まれていた。また、公家たちは自らの庭園のみならず近辺の寺や室の庭に梅花を見に出かけ、梅花の咲き具合・香り・和歌の題詠を行い楽しんだ。その際は接待として簡単な間食が出され、その後に梅花盃での酒盛りが行われた。また進物としても盛んであり、しばしば梅の枝が贈られたが、それに和歌・花袋など様々なものを付随させ、枝の数も時代が下るにつれて次第に多くなった。これらの贈られた梅の枝は客殿などに並べ立てられ、お客の飾りとしても使われた。室町時代中期になると、応仁・文明の乱という武家たちの争いで都とその周辺が乱れた時代となったが、公家たちは依然このように梅を賞でて生活を送っていた。

その後、時代が下ると宋より鉢植えの趣味が渡来し、盆梅として鉢にも植えられるようになった。ただし、日本では土は不浄の物とされ、鉢植えも室内には入れないで庭へおいで観賞した。また、庶民が裕福になり、特権階級の庭園に囲われていた梅の花見が庶民の間にまで広がった。紅梅の美しさも人々に知られるようになり、庭木として珍重された。

また書院造の床の間の飾りとして立花(生花)が生まれ、梅が多用された。書院造とは室町時代中期以降に成立した住宅の様式であり、まず禅寺・武家に広まりついには町衆に及んだものである。初期のいけばなの伝書である『仙伝書』によると、梅は二月と十二月(早梅)において真とする花とされている。『池坊専応口伝』では、梅はこれに加えて五節句のうち

の正月の花とされる。梅は祝儀の花とされ、松竹と共に専ら祝言(結婚、出家など)に用いられる花材の最上位に位置づけられた。

天神信仰は、南北朝時代から室町時代にかけて、靈験あらたかな神として非常な隆盛をみせた。これは足利氏が北野天神と密接な関係をもってきたことに大きな力があつたと思われる。北野天神は連歌の神として祀られるようになり、道真の命日の二月二十五日には御忌の祭りと共に法楽連歌が行われるようになった。御忌の祭りは鳥羽院御宇の1109年より始まったもので、その日の夜になって御供田を預かっている家より大小数々の神供を調べ、御供所にかざり、本殿に捧げる。大御供は飯をうず高く盛り、その上に菜の花を挿すため菜種御供というが、年により菜の花は未だ開花していないときには梅花を挿すのでまたの名を梅花祭ともいう。また、この頃梅の神木としての扱いが変化し、神として末社に祀られるという神格が与えられている。実際に関東では、1486年太田道灌が靈夢をみて、江戸城の北畔に菅公の廟をたてて梅樹数百本を植えたことが有名である。

禅は室町時代において、室町幕府の宗教として繁栄し、特に足利義満の治世下である1386年に全国に広がる幕府の官寺として認められた禅宗寺院を五山、十刹、諸山の三段階にわけて管理する五山制度が成立した。室町時代では、禅寺で梅を植え、その花をめであることがさかんであり、南禅寺の住持だった九淵は詩会をかねて梅見を行っている。梅見として立ち木に咲く梅花を禅僧たちは観賞していたが、開花した梅の枝を室内に持ち込んで瓶にさし「浴梅」としても楽しんでいる。また、万里集九は『梅花無尽蔵』の中で茶をすすりながら梅についての話(梅が評価される原因やその評価の結果と報いについて)をしている。また、白梅のみならず紅梅もめであるようになった。

以上より室町時代では、公家化した足利氏の影響下で、質素な梅がより貴族文化へと吸収されていく様態や、梅が庶民化していく様態が見て取れる。扱いとしては、庭木利用、盆梅利用、生花利用、観賞・文学・絵画の対象(観賞が庶民化)があることが分かる。また、関連する社会文化的要素としては、武、天神信仰、禅の思想などが挙げられる。

4.2.6 江戸時代

江戸時代は、武士・貴族のみならず町人などの庶民がより力を増した時代であり、花文化などが大衆化した時代である。それを受けて品種改良が盛んとなり、様々な品種が産出された。また、都市が拡大し、貨幣経済が浸透、商品流通が充実した時代でもある。

徳川家康・秀忠・家光といった江戸初期の三大の将軍が強い花好きであったことから、それは大名・旗本らも好むところとなり、盛んに花を栽培し贈りあった。よって、大名屋敷の庭園には珍しい梅が植えられ、それを自慢する・献上するという風潮があった。一方では、特権階級の庭園にのみ植えられていた花梅が庭木として個人の庭に植えられ、園芸植物として庶民の暮らしの中に溶け込んだ。室町時代に始まった盆梅は縁側や屋敷の中に飾られるようになった。

また、実梅としての梅が栽培されるようになったのもこの時代である。これは、幕府は戦の際の非常食や飢饉の際の食料として各地において栽培を奨励したことによる。

以上より、江戸時代は花文化の大衆化と共に梅も大衆化し、梅実を目的とした栽培に再び焦点が当たった時代である。梅の扱いとしては、庭木利用、盆梅利用、観賞・文学・絵画の対象、食用が挙げられる。関連する社会文化的要素としては、武、農業、王朝文化などが挙げられると考えられる。

4.2.7 まとめ

関連要素と扱いの関連の実際的な経緯は以下のようになっている。

基層に中国から流入した「舶来もの」「栽培植物」としての意義があり、それにより武の氏である大伴氏と関連し中国から梅花を見る文化(雅という思考)が流入した。その後庭園文化の流入や風景をめぐる風潮、中国文化を好む風潮から宴・花見に取り入れられた。そして中国から流入した学問の象徴・禅における悟りの象徴等が日本に根付き、貴族文化へと取り込まれ、貴族文化への憧れから、各階層・地域にそういった梅の扱いが伝播した。ただし桜に比べて特別に興味のある人に多かった。一方、果樹・禅での利用などは依然とし

て行われていた。

このように、梅の主な歴史的実態は、中国から流入する梅観を中心とした実用・好文木・禅などに関わる質素な梅観(白梅中心)と、日本の貴族文化において美や雅として取り扱われる華美な梅観(紅梅中心)の2つの潮流からなる。そして中国から絶えず前者が流入し、それが後者へと影響または吸収されていく。

以上が梅の歴史的実態である。

4.3 花の社会文化史に関する考察

以上のように、桜と梅の間には分類上近縁であるにも関わらず、関連要素や歴史の実態に差異が見られた。桜では富・権威や美の象徴としての役割が主だが、梅では質素と華美の潮流がある。この理由として、桜では政治的色彩を帯びたことにより審美的価値の部分が肥大化していること、梅では中国由来の質素なものとしての価値が次々と混入し、それが華美なものとなっていくという図式があることが考えられる。

また、桜・梅共に貴族文化のような華美な花観をもって扱われるが、桜では宮中・寺など権威のある場所に植栽され豪華な宴が行われるのに対し、梅では盆梅・生花・枝折などの持ち運べるものや、邸宅の樹木として扱われる。その理由としては、梅は桜に比べて香りが高く開花時期も長いなどの生物学的特徴の差異、梅は果樹として中国から流入したが桜は日本と権威と密着に関連したというより基層にある背景、桜では仏教と関連し寺での植栽があるが梅では天神と関連するなどの華美な花観とは別の潮流の影響が考えられる。

このように、桜と梅の歴史の実態には共通する領域と相違する領域があり、更に共通する領域においても各花間ですみわけが行われる。そして、両領域は時代を追うごとに新たに様々な要素と結びつき、多様化していく。

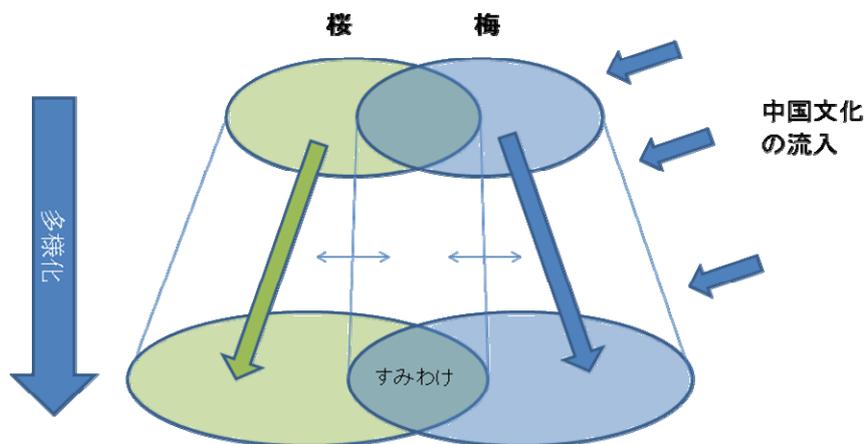


図3 桜・梅の実際的な歴史の実態

このように実際的な歴史的事実についてまとめ、各花において様々な関連要素があり、それぞれに伴って花は多様に扱われることに触れた。しかし、それらには通底するものが存在すると考えられる。

桜は基層に「山にあるもの」としての意義があり、“山の桜の開花が「稲の豊作の予祝」と結びつき、それを先祖とおこなう「山行き」つまり「墓参りして先祖と供宴する」ことになり、「その場を示す墓印」に桜木がなりえた”というように、時代を追うごとに稲作、修験道、政治、王朝文化、都市文化、仏教(花祭り、浄土宗)などの社会文化的要素との関連に波及した。そして関連する社会文化的要素の性質を考えると、公的・権威的・開放的であり、偉大で遠くにあるものを愛でるといったものに占められる。例えば、浄土宗は極楽浄土に転生できるよう念仏を唱えるものであり、間口が広い。浄土式庭園は記号が多いとされる。このように、桜は「山にあるもの」という本性を有し、それに伴って公的・権威的・開放的な社会文化的要素と関連しやすいと考えられる。

一方梅は基層に「栽培植物」としての意義があり(それとして中国から流入してきたことによる)、畑・庭などに植栽されて果樹利用され、それに対して観賞などの扱いに広がったように時代を追うごとに学問、禅、武、王朝文化等などの社会文化的要素との関連に波及した。そして関連する社会文化的要素の性質を考えると、私的・内的・閉鎖的であり、限られた抽象的なものへ向かうものに占められる。例えば禅の思想は、坐禅により意識を内奥に向け自己の本性に立ち返ることを目指すものである。禅庭園は空間の意味をゼロに戻すことで逆に世界をありのままに見ようとすると言われる。このように、梅は「栽培植物」という本性を有し、それに伴って私的・内的・閉鎖的な社会文化的要素と関連しやすいと考えられる。

こういった通底した歴史的事実の差は花の扱いの差にも表れている。それが前頁の有り様である。例えば品種においては、桜の「山のもの」という本性は、山林開発にともなう桜の取り残しによって近親交雑を促し、沢山の自然交雑種が生み出された。一方、梅の「栽培植物」という本性は、優秀な果実を作り出すために人工的に交雑が促し、沢山の人為的

交雑種が生ま出された。このような違いが様々な領域で表れていくのである。

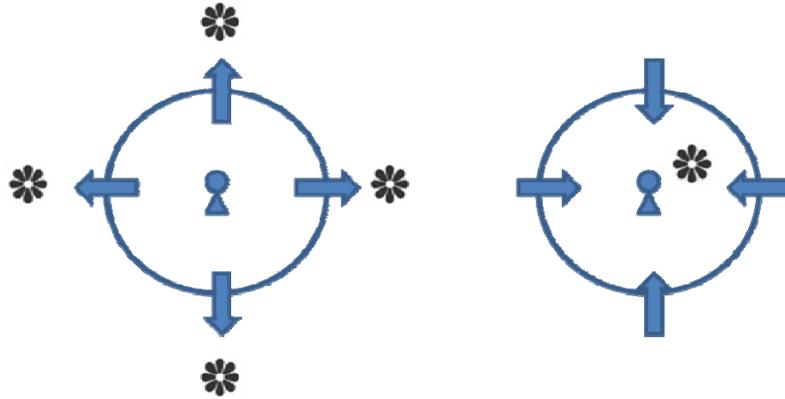


図4 桜・梅の通底した歴史的事態

(左が桜、右が梅を表す)

以上の見方が桜と梅の歴史的事態に関する考察であり、社会文化史から見た一種の仮説である。後者では、各花の歴史的事態の通底する部分に着目し、各花の歴史的事態の一貫性を示している。そして前者では、その通底した歴史的事態が実際に具体化している様態を示している。

これらを次の第5章において、近世江戸の花の名所を一つのケースとして検証することとする。これにより、花の歴史的事態と場所性の関連を考察することとなる。

第5章 近世江戸における花の名所

5.1 近世江戸の花文化・名所の文化の概要

まず、近世江戸における花の名所について言及するために、背景となる近世江戸の花文化と名所の文化について説明する。

5.1.1 花文化概要

近世江戸は、花文化が大衆化し、盛んになった時代として知られている。背景としては、まず徳川家康・秀忠・家康の将軍3代が花好きであったことや、各階層が裕福になり安定した時代であったことが挙げられる。また、1657年の明暦の大火で江戸市街の大部分が焼失し、武家屋敷の復興・郊外移転が図られ、庭木の需要が急増した結果、植木屋の発展・園芸品種の大幅な増大が生じたことなどが挙げられる。そして、武家の庭、植木屋の庭、料理屋の庭、元々あった寺社の森などが発展して、連続した散策地となり、後に田園都市と呼ばれるような江戸という都市が形成されたとされている。

5.1.2 名所の文化概要

また、近世江戸は名所や、それらを巡る行楽などの行動文化が盛んになった時代として知られている。元々「名所」とは和歌の歌枕である名所(などころ)を指すものであり、いわば地名と美的感性のイメージが結びついた一種の記号として古代以来面々と続いてきた、貴族のための場所であった(鈴木, 2001)。このことから、江戸時代初期の名所というと、古歌に知られる隅田川、浅草などの名所旧跡を指しており、文人のための場所であった。しかし元禄前後になると、各地から江戸に来る地方侍や江戸を見物したい人々の物見遊山の対象として、元々江戸に存在した場所の中から、多くの名所旧跡が取り上げられるようになった。そして享保～延享になると、江戸の生活の場としての市内の整備と共に、人為的

な名所が造られるようになり、その際に多くの花の名所が造られた。このように、名所案内記の普及も手伝って、名所は大衆が行楽のために巡る場所としての意味が強まったのである。

5.2 名所の抽出

近世後期の代表的な名所案内記である『江戸名所図会』と、花の名所を多く取り上げている近世後期の名所案内記である『江戸名所花暦』から各花の名所を抽出した結果、桜 57ヶ所、梅 20ヶ所抽出した。

下の表は『江戸名所図会』と『江戸名所花暦』の概要である。『江戸名所図会』は、近世後期を代表する名所案内記であり、近世全体の名所案内記の完成系とも言われるものである。それまでの道案内などの実用性から一歩進んで科学的手続きを経た名所案内記であり(鈴木, 2001)、記載する価値のあるものを精査していることが凡例から伺える(羽生・岡野, 2003)。以上の理由から代表的な近世の名所を取りこぼしなく抽出できると考え、選定した。また『江戸名所花暦』は、春は鶯・梅・桜、夏は蛩・納涼・蓮、秋は萩・月・虫、冬は寒梅・松・枯野・雪見など、四季折々の花鳥風月を計 43 項目に分類し、それぞれの名所・名木の解説、由来、場所の道順などを詳細に説明した名所案内記である。よって花ごとに項目が存在し、名所が豊富であるため選定した。

表 3 対象とする名所案内記

書名	著編者	刊行年	巻数
江戸名所図会	斎藤月岑 著 長谷川雪旦 画	天保 5-7 年 (1834-1836)	7 巻 20 冊
江戸名所花暦	岡山鳥 著 長谷川雪旦 画	文政 10 年 (1827)	4 巻 3 冊

ここで「名所案内記」という用語についてであるが、鈴木(2001)の造語を援用したものである。江戸時代では名所を記した様々な書物が出版されており、それに対する呼称も様々なものがある。「案内記」というと意味するところは旅行手引きとしての地誌であり、「名

所記」というと意味するところは歌枕として優れた名所の地を集成したものである。しかし、これらは厳密に区別することが難しいため、それらの総体として鈴木(2001)は「名所案内記」という造語を規定した。よって本研究でもこの用語を用いることとした。

5.3 名所の立地分布と分析方法

5.3.1 立地分布

江戸城周辺における各花の名所の立地分布は、以下の図のようになっている。



図5 花の名所の立地分布(分間江戸大絵図(1859)を改変)

(黄色が桜の名所、青が梅の名所を表す)

これによると、桜の名所は凝集傾向にあるが、それに比べて梅は拡散傾向にある。これは桜の名所に寺社、特に寺院が多く、寺院は移転や支院制度に伴い、集合しやすい傾向にあった(刀根ら, 2003)ことが原因として考えられる。ただし、桜の名所数が梅の名所数に比べて圧倒的に多いため、それが凝集という様態に繋がりやすいとも考えられる。

5.3.2 分析方法

西山(1975)や田島(1993)などにより江戸の名所は江戸城からの距離で役割が異なっていたとされることから、江戸市中・江戸近郊・江戸遠隔地の3つに立地を区分し、各花の名所の属性・魅力要素・花の扱いを見ていくこととした。区分の定義は、江戸市中を墨引内、江戸近郊を墨引外かつ朱引周辺、江戸遠隔地を朱引から離れた名所とした。



図6 江戸の範囲(文政江戸朱引図(1818)を転用)

(内側の境界線が墨引、外側の境界線は朱引を示す)

墨引とは江戸町奉行の支配範囲を示すものであり、これは明治11年の東京15区の範囲とも重なることから、墨引が江戸後期の市街地の範囲とほぼ重なると考えられるため、江戸市中と江戸近郊の境界とした。また、朱引とは寺社奉行が江戸府内で勧化を許可する範囲であり、公式の江戸の範囲とされる。ここで小野(1983)によると、「文化の頃には郊外をこえて、さらには江戸の外へと人々の参詣と遊覧の足がのびているのを見ることができるとされることから、江戸近郊と江戸遠隔地の境界を朱引とした。

属性としては、抽出した名所を「寺社」「高台」「川」「村」「町」「武家屋敷」「茶屋」「遊郭」「坂」「商人の庭園」に分類した。これを元に各花の名所の特性を把握・比較していくこととした。

また、魅力要素の把握の方法としては、『江戸名所図会』に記載されている内容を分析することとした。岡野(2002)などの既往研究によれば、名所に関する情報は近世後期の名所案内記ほど内容・種類が増えており、新たな魅力が付加される傾向があることから、近世後期の『江戸名所図会』に記載されている内容が近世に蓄積された魅力の集大成であると解釈することができる。羽生(2003)を参考とし、記載されている内容を抽出して KJ 法的に分類すると、「年中行事」「物理的要素」「自然」「商業」「眺望」「群集」「門前」「名物」といった項目に整理することができた。更に「年中行事」については「祭礼」「市」、「物理的要素」については「堂・祠・社等」「仏像・什器等」「その他付属施設」が下位の項目として含まれる。この分類を用いて各名所の記述を分類し、記述数を把握することで各名所の魅力となっている要素の傾向を把握・比較することとした。ここで記述数を用いて魅力要素を扱うため、魅力要素の割合などを直接的に考察することはできないが、魅力要素の在り方の傾向などは把握することができると考えられる。各名所なお、全ての名所について来歴や道案内の情報が記載されていたが、ここでは記載されている内容から省略することとした。また、『江戸名所花暦』のみに記載される名所も存在するが、『江戸名所花暦』は花に焦点をあてた記述であるため、名所全体の特徴を述べるには不十分であることもあり、そのような名所の魅力要素は花に焦点が置かれていると処理することとした。

表 4 魅力要素概要

魅力要素	概要
物	堂・祠・社、仏像・什器など
行事	祭礼・市など
自然	植物・石・地形など
商業	商業施設など
眺望	名所からの眺め
群集	人々の群集する様子
門前	門前の賑わいの様子
名物	料理・土産など

5.4 桜・梅間の比較－江戸市中の花の名所

江戸市中における名所の一覧を右に示す。

5.4.1 属性

桜においては、属性に「寺社」「寺社(名木)」「武家屋敷」「遊廓」があり、中でも徳川縁を有した権威のある「寺社」が多く見られた。東叡山寛永寺は徳川将軍家の祈禱寺、三縁山増上寺は徳川将軍家の菩提寺である。また、武家屋敷は上級武士のものであり、敷地が大きい所であったが、公開されることはない傾向が強かった。

一方、梅においては、属性に「天神」「寺社(名木)」「武家屋敷」「茶屋」があり、中でも「天神」が多く見られた。しかし、摂社や旧地が多く小規模の所が多い。また、武家屋敷は下級武士のものであり敷地の狭い所であった。

また、桜・梅共に名木としての役割があった。名木を有する寺社は近郊に近い所に立地することが多かった。

表 5 江戸市中における桜の名所

名所名	図会	花暦	属性
東叡山寛永寺	○	○	寺社
花屋舗		○	武家屋敷
神田明神	○	○	寺社
新吉原	○	○	遊廓
金龍山浅草寺	△	○	寺社
長耀山感応寺	○	○	寺社
慈雲山瑞輪寺	△	○	寺社
日暮里	△	○	町
宝珠山延命院		○	寺社
無量山伝通院	△	○	寺社
諏訪山吉祥寺	○	○	寺社
神諭山護国寺	○		寺社
正念寺		○	寺社
天沢山竜光寺		○	寺社
花溪山道栄寺		○	寺社
根津権現	△	○	寺社
白山神社	○	○	寺社
北野神社	△	○	寺社
渋谷八幡宮	○	○	寺社
三縁山増上寺	△	○	寺社
長青山寶樹寺梅窓院	○		寺社
百蝶山鳳閣密寺	○		寺社
木下侯庭中		○	武家屋敷
慈限山光林寺		○	寺社
鶴亀山笠閑寺	○		寺社
富岡八幡宮	○		寺社
鬼子母神堂		○	寺社
天恩山五百羅漢寺	○		寺社

表 6 江戸市中における梅の名所

名所名	図会	花暦	属性
梅林坂	○		坂
茅野天満宮(増上寺内)	△	○	寺社
飯倉天満宮(増上寺内)	○		寺社
宇米茶屋	○	○	料理屋
麻布竜土組屋舗		○	組屋敷
湯島天神	○		寺社
駒込鯉縄手		○	組屋敷
雲居山宗参寺	○		寺社
金毘羅大権現社	○		寺社

なお、△は花の記載がないことを示す。

5.4.2 魅力要素

桜においては、「自然」の他に「物」「行事」など多くを有していた名所が多い。これは桜の名所として寺院や権威のある神社が多いことが影響していると考えられる。徳川家康入府以前からある古刹であったり、大きい面積を有するなど大規模な名所が多いため、建造物など魅力的な要素を多く抱え込んでいたと考えられる。

一方梅においては、「自然」が重視される所が多い。というのも、梅の名所に摂社・旧地となっている天神など小規模な名所が多く、他に魅力要素を有することが難しいということが考えられる。ただし、湯島天神は面積も大きく門前が発達しており、岡場所も近かったことから大変な盛り場であった。

5.4.3 花の扱い

空間的な特徴としては図に見られるように、桜は並木など空間的に広がりのある植栽となっており、数千株植えられる所も多いが、梅は小規模な植栽が多い。

また、桜では、桜花が咲く頃に幕を張り、筵を敷いて花見を行っており、桜を含めた景色を楽しむ、桜を背景として楽しんでいたことが多かったことが文学作品から読み取れる。一方、梅では、限られた植栽を対象に和歌を詠むなど、貴族的・文人的観賞が行われていたとされている。



図7 上野清水堂 歌川広重 『江戸名所百景』より



図8 湯島天満宮 歌川広重 『江戸名所』より

5.4.4 まとめ

江戸市中は、江戸幕府の都市政策のゾーニングによって土地・寺社地が大部分を占める区域となっている。特に江戸の寺社は、1590年の徳川家康入府後に江戸が関東の首府となり、四民が集うようになるに従って新たに起立または移転したため非常に多い。しかし、幕府が権力のある寺社を統制するための一つの策として寺院に対する檀家制度(民衆が寺請制度によって決められた檀那寺を離れること、変えることを禁じる制度)を強行しており、新たな寺院が建立されると問題が引き起こされることから、寛永8(1631)年の法令で新たな寺院の建立を禁じている。

ともあれ、このような背景から江戸市中の名所には、宗教的な要素が関連しやすかったと考えられる。江戸市中では信仰との結びつきによるレクリエーションの年中行事化が行われていた。また、幕府は神社よりも仏寺を重んじており、江戸には1000余りの寺院が存在していたが、神社はその割の100程しか存在せず、小さな社・祠が多かった。このことから、桜が植栽される傾向がある寺院と、梅が植栽される傾向がある神社(天神)とでは、その規模に差が生じるのは当然と考えられる(ただし、湯島天神は徳川家康公が江戸城に入るに及び崇敬すること篤く、朱印地を寄進されたことから大規模である)。このことから、各花の魅力要素に差異が生じ、「自然」の他に「物」「行事」など多くの魅力要素を有していた桜の名所は上野・浅草などの総合的な遊覧地の中心となり、「自然」が重視される傾向の強い梅の名所は総合的な遊覧地の一部をなすものに過ぎないという位置づけであったと考えられる。

また、桜では植栽背景に「吉野山の模倣」「寄付」「遊園整備」「庭木利用」等があり、花への関連要素に「王朝文化」「権威」「庭園文化」等が認められた。一方梅では植栽背景に「天神の神木」「庭木利用」等があり、花への関連要素に「天神」「庭園文化」が認められた。江戸市中は、土地・寺社地が大部分を占める区域であるため、宗教的な要素や権威、王朝文化などが関連しやすかったと考えられる。これらの要素が関連することにより、花と場所が結びつき花の名所の在り方と繋がったと考えられる。

5.5 桜・梅間の比較－江戸近郊の花の名所

江戸近郊における名所の一覧を右に示す。

5.5.1 属性

桜においては、「寺社」「寺社(名木)」「高台」「川」があり、主に王子・品川・向島・高田といった地域に集中しており、特に王子・品川は徳川縁が深く、八代将軍徳川吉宗が整備・再整備した名所が多い。

一方梅においては、「天神」「商人の庭園」があり、亀戸と向島に2分される。なお、御嶽社は亀戸天満宮の摂社であり、道真の教学上の師である延暦寺第十三代座主、法性坊尊意僧正を祀る神社である。

表7 江戸市中における桜の名所

名所名	図会	花暦	属性
飛鳥山	○	○	高台
王子権現	○	○	寺社
岸稻荷社	△	○	寺社
松橋弁財天社	○		寺社
隅田川堤	○	○	川
梅柳山木母寺	△	○	寺社
水神社		○	寺社
元八幡宮(富岡八幡宮)	△	○	寺社
御殿山	○	○	高台
海賞山来福寺	○	○	寺社
栄松山西光寺	○	○	寺社
大井山弘福寺	○		寺社
鹿嶋大明神社	○		寺社
妙法山法華寺	○		寺社
毘沙門堂	○		寺社
高田七面堂	○		寺社
福聚山常円寺		○	寺社
医光山円照寺	○	○	寺社

表8 江戸市中における梅の名所

名所名	図会	花暦	属性
亀戸梅屋敷	○	○	商人の庭園
亀戸天満宮	○	○	寺社
御嶽社	△	○	寺社
百花園		○	商人の庭園

なお、△は花の記載がないことを示す。

5.5.2 魅力要素

桜における魅力要素は名所により多様であり、自然のみの名所もあれば、行事や物を多く有する名所もあった。注目すべきは眺望を有する名所が多いことであり、広々と山・川・海の景色が楽しめる名所が目立った。

一方梅の魅力要素においても、桜と同様に名所によって多様であった。しかし、桜と比べ徳川縁が薄い名所が多く、眺望がなく面積も小規模な所となっていた。

5.5.3 花の扱い

植栽された本数としては、桜は多くて数千株、梅では多くて数百株であり、名木を除いて梅に比べて桜の本数が多いことが伺える。この背景には桜の名所の面積は大規模、梅の名所の面積は小規模ということが挙げられるが、他に植栽の空間的特徴も挙げられる。下の図のように、桜は広がりのある植栽が行われる傾向があるが、梅は図のように、梅園などとして囲われた植栽であることが多い。これが花の本数にも影響していると考えられる。

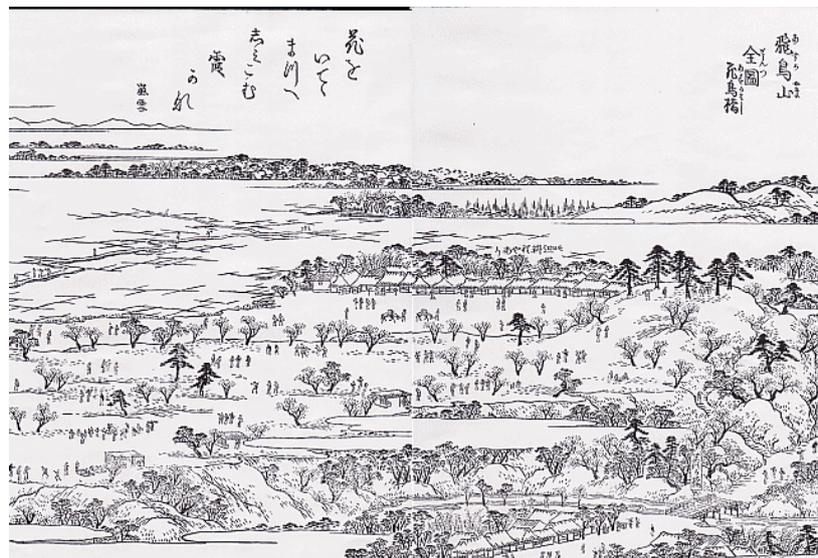


図9 飛鳥山 長谷川雪旦 『江戸名所図会』より



図 10 亀戸宰府天満宮 長谷川雪旦 『江戸名所図会』より

また、桜では眺望の良い名所が多いこともあり、景色を楽しむことや、それを背景として宴を行うことが多い。一方、梅は花の香りや樹姿を褒めたたえて漢詩を賦すこと、和歌を詠むこと、俳句を吟じるなどが行われるほか、茶や梅実などの食事を楽しんだ。このように、桜においては花を全体的な景色・背景として楽しむことが多かったが、梅においては花や樹姿、実など花に焦点を当てた楽しみ方がなされた。

5.5.4 まとめ

江戸近郊は、都市の拡大によって開拓された区域であり、農村と都市の境界に位置するようになる。都市化の進展と共に行楽の場として重要性を増し、近世中後期には寺社の再整備・新名所の整備が行われ、名所化したところが多い。その結果、近郊には様々な属性の名所が集中した総合遊覧地が出現していった。

名所の在り方としては、桜・梅共にそれぞれが多様な魅力要素を有し、総合遊覧地に組み込まれているものであると考えられる。しかし、桜の名所には眺望がある所が多いこと、梅の名所には眺望が魅力要素として挙げられている所がないことから、その総合遊覧地の性質が、または総合遊覧地の中でも町に囲まれこじんまりとした小規模なものであったこ

とが推察される。

また、桜では植栽背景に「遊園整備」「灌仏会のための植栽」があり、花への関連要素に行楽化された「王朝文化」「仏教」が認められた。一方梅では植栽背景に「天神の神木」「庭木利用」「梅実の商材として利用」があり、花への関連要素に「天神」「庭園文化」「栽培」が認められた。これらの要素が関連することにより、花と場所が結びつき花の名所の在り方と繋がったと考えられる。

5.6 桜・梅間の比較－江戸遠隔地の花の名所

江戸近郊における名所の一覧を右に示す。

5.6.1 属性

桜においては、「寺社(名木)」「川」があり、特に「寺社(名木)」が大半を占める。これらの寺社は徳川家康入府以前から存在する古い寺社ばかりであり、当時の地方の大名や後北条氏など、江戸以前特に鎌倉時代以降の人物の影響が強い。よって、江戸時代には荒廃している名所も存在する。また、小金橋とは玉川上水にかかる橋である。

一方梅においては、「寺社(名木)」「村」がある。ここで含まれる寺社も桜と同様に徳川家康入府以前から存在する古い寺社ばかりであり、当時の地方の大名や後北条氏など、江戸以前特に鎌倉時代以降の人物の影響が強い。そして、荒廃した神社や、神社の旧地が含まれる。また、「村」として取り上げられているのは、いずれも梅の栽培が行われている農村である。

また、「寺社(名木)」においては、桜・梅に共通する名所も存在する。

表9 江戸市中における桜の名所

名所名	図会	花暦	属性
大溪山蒙徳寺	○		寺社
宮坂八幡宮	○		寺社
小金井橋	○	○	川
松亀山泉谷寺	○		寺社
淡島明神社	○		寺社
松本山廣福寺	○		寺社
金鳳山平林禅寺	○		寺社
金澤山称名寺	○		寺社
北野天神社	○		寺社

表10 江戸市中における梅の名所

名所名	図会	花暦	属性
蒲田村	○	○	村
蒲田梅屋敷	△	○	梅屋敷
天神森	○		寺社
本牧十二天宮	○		寺社
杉田村	○	○	村
金澤山称名寺	○		寺社
北野天神社	○		寺社

なお、△は花の記載がないことを示す。

5.6.2 魅力要素

桜の魅力要素においては、「自然」の他に「物」「行事」「権威」を有する所が多かった。これは桜の名所として寺院が多いことが原因として挙げられる。それに加え、鶴岡八幡宮を模した神社(宮坂八幡宮)や、北条氏との縁がある寺院(松亀山泉谷寺)など、鎌倉時代に権威を有していた寺社が多く見られることもその背景にあると考えられる。また、小金井橋は遠隔地にありながら料理屋など行楽地としての機能が充実していた。

一方梅の魅力要素においては、「自然」が主である所が多かった。これは梅を栽培する農村が名所に含まれること、田舎の荒廃した神社が含まれることが挙げられる。

5.6.3 花の扱い

空間的特徴としては、桜では名木を有する寺社が圧倒的であることから、少ない本数を境内などに小規模に植栽するというものであった。また、小金井橋では玉川上水の堤に並木として大量の桜が植栽され、広がりのある植栽となっている。なお、小金井橋の桜は吉野山・桜川といった古くからの桜の名所から移植したものであり、紅色が強い桜と白色が強い桜が入り混じっている。一方梅では、名木を有する寺社については桜とほぼ同様であるが、農村では民家の庭や畑に少数植栽されていた。これらは実をとることを目的としたものであり、一重白梅である。しかし、そういった民家が特化した蒲田梅屋敷においては、村の様々な品種がとり揃えられ多くの株からなる梅園が造られた。

また、桜では名木を有する寺社が圧倒的であることから、少ない本数の桜を由緒ある対象として楽しむことが多かった。また、小金井橋では江戸近郊の桜の名所と同様に人が群集し、花見が行われた。飲食楼などもあり、少しの飢えはしのぐことができた。一方梅では、名木を有する寺社については桜とほぼ同様であるが、農村では道を行き来しながら眺めるという観賞形態であった。時代が進むにつれて茶屋なども現れた。また、蒲田梅屋敷は元々茶屋として開かれたため、茶を飲みながら休みつつ梅を観賞するといった形態であ

った。



図 11 小金井橋夕照 歌川広重 『江戸近郊八景』より

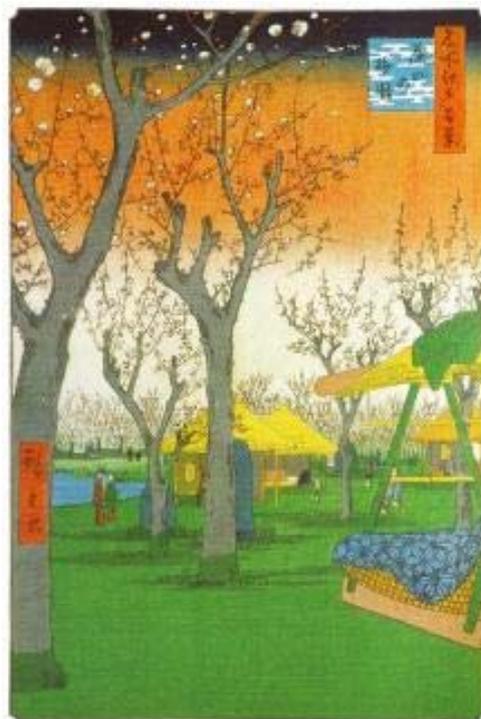


図 12 蒲田の梅園 歌川広重 『江戸名所百景』より

5.6.4 まとめ

小野(1983)により、「文化の頃には郊外をこえて、さらには江戸の外へと人々の参詣と遊覧の足がのびているのをみることができる」とされるように、時代が進むにつれ、江戸の遠隔地に名所として目が向けられるようになる。また歴史・伝統に行楽地としての魅力を感じ始めた時期でもあったため、鎌倉時代以降に栄えた寺社が名所として取り上げられるようになった。なお、鎌倉時代には八幡信仰がさかんであり、八幡宮など権威のあった寺社には桜が植栽された。

一方、江戸時代には戦の際の食糧や飢饉の際の非常食として梅の栽培が奨励され、農村では梅を栽培する所が現れた。これらは江戸でも賞翫されていたが、梅のみで生計を立てるのは困難なことから、庭や畑に幾らか植栽するのみであったが、村中に存在すると結構な数となる。これが遠隔地の行楽化の影響を受け、名所として取り上げられるようになった。こういった背景から、桜の名所として寺社、特に鎌倉時代に権威のあった寺社が多く、梅の名所として梅の栽培を行う農家が集合する農村があることとなる。

また、上でも述べたように、桜の魅力要素においては、「自然」の他に「物」「行事」「権威」を有する所が多く、梅の魅力要素においては、「自然」が主である所が多かった。ここで遠隔地へ自然を観賞するのは特別に趣味が有る人に限られていたことから、桜の名所には権威・利益を求めて大多数の一般民衆も来たものの、梅の名所にくる民衆は限られたと考えられる。

桜では植栽背景に「堤の補強」「水毒の浄化」があり、花への関連要素に「実用」が認められた。一方梅では植栽背景に「天神の神木」「梅実利用」があり、花への関連要素に「天神」「農業」が認められた。これらの要素が関連することにより、花と場所が結びつき花の名所の在り方と繋がったと考えられる。また、桜・梅共に名木としての役割があった。

5.7 花の歴史的事実との関係

5.7.1 通底する歴史的事実との関係

以上のように、各花で名所の在り方に差異がみられた。実際的事実的差異は立地区分ごとに上で述べたが、全体として見られるのは、桜においては、

- ①多様な魅力要素
- ②多様な人々の来訪
- ③景色・背景としての楽しみ

梅においては、

- ①限られた魅力要素
- ②特別に趣味の有る人の来訪
- ③花・実の楽しみ

である。この背景には、第4章で述べた、公的・権威的・開放的な桜と、私的・内的・閉鎖的な梅といった歴史的事実的通底する対比が見て取れる。名所自体が非日常で行楽する空間であったことを踏まえると、桜の名所では、様々な階層との接触や酒・歌などを伴う自由な宴といった開放的な非日常の営為が行われたとされている(小野, 1992 ほか)が、それに対して梅の花見は限定された人々との接触や文学を追求するといった、様々なものがろ過され厳選された非日常の営為が行われる傾向があったのではないだろうか。

5.7.2 実際的事実的歴史的事実との関係

そして、上記で述べた通底するものは地域としての特徴や名所の特徴の違いから、現れる関連要素の違いを通じて立地区分によって異なった多様な形で表れ、名所のあり方や区分内のすみわけに繋がっていくと考えられる。例えば地域としての特徴としては、市中に

は都市計画・宗教政策により寺社地・土地が多いこと、近郊には近世中後期に整備された遊覧地が多いこと、遠隔地には家康の入府以前から存在する名所が存続・荒廃し、また幕府によって梅の農業的利用が推進されたことなどが挙げられる。

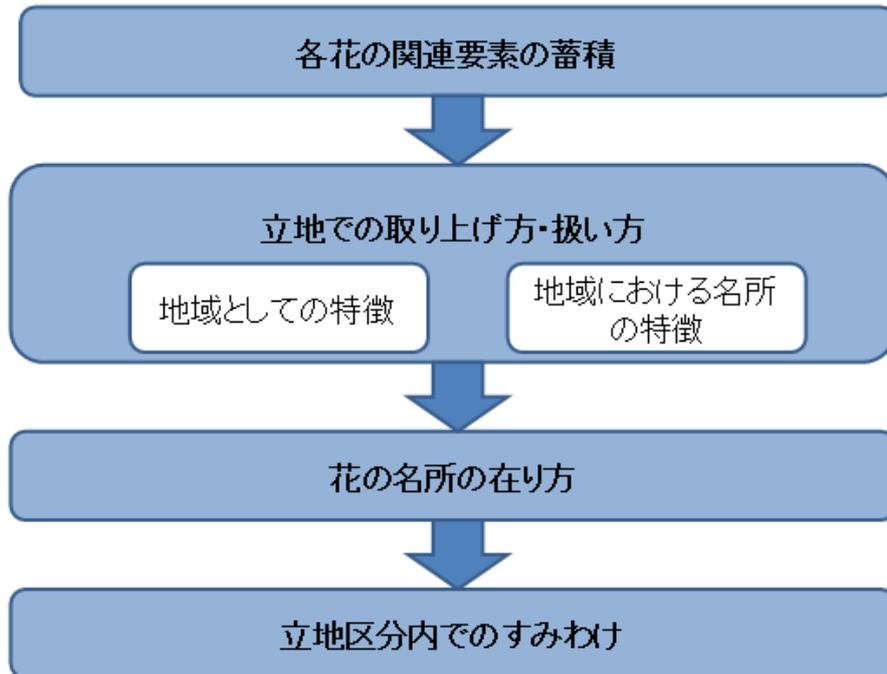


図 13 関連要素と名所の在り方・すみわけとの関連の様態

具体的には、取り上げられる関連要素としては桜・梅共に、権威・王朝文化など華やかな花観と関わる要素が市中に多く、それ以外の部分が近郊・遠隔地に多かった。これは上記の説明によると、市中に多い土地・寺社地では権威・王朝文化や宗教的要素との関連がなされやすく、結果華やかな花観が現れやすくなっていると考えられる。よって、都市から離れるにつれてそれ以外のより基層に近い花観をもって扱われるといえる。そして、名所化は江戸時代を通じて市中⇒近郊⇒遠隔地の順序で広がったことから、華美・貴族的な花観からその他の花観へ名所化が広がったと考えられる。

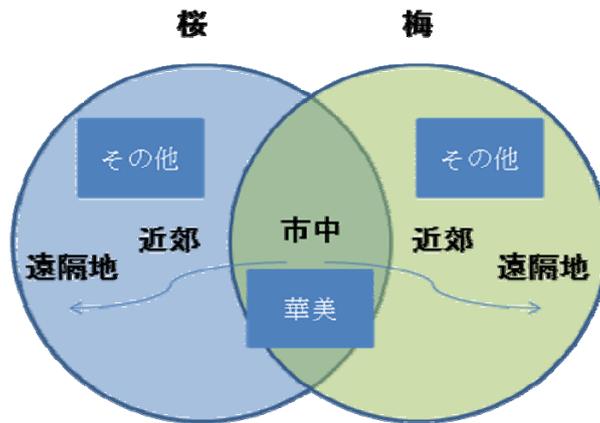


図 14 立地区分による花内の関連要素の差異

一方、市中において華美な花観をもって扱われるという共通点の中、第 4 章で考察したような華美な花観におけるすみわけの様態が、市中における各花の名所の在り方・すみわけの様態に通じているのではないかと考えられる。この点においても各花の歴史の実態が表出していることが見てとれるだろう。

第6章 結論と展望

以上のように、各花の歴史の実態が名所の場所性に関連することとその内容を考察できた。まず、桜は「山にあるもの」という本性を有し、公的・権威的・開放的な象徴としての通底した歴史の実態を有するものと考えられた。一方梅は「畑・庭の栽培植物」という本性を有し私的・内的・閉鎖的な象徴としての通底した歴史の実態を有するものと考えられた。これらは様々に具体化・多様化し、桜・梅間においてすみわけがなされていく。

そして、これは近世江戸における花の名所においても当てはめることが出来ると考えられた。桜は公的・権威的・開放的な象徴として、そういった場所性を名所に与え、一方梅は私的・内的・閉鎖的な象徴として、そういった場所性を名所に与えたことが伺えた。

“場所”というものの一つをとっても、その中には様々な要素が包含されている。それらの要素には各々に人とのかかわりの歴史の蓄積があり、様々な意味合い・象徴が含まれている。これらのうち、引き出されるものは空間・時間などあらゆる条件によって異なるものであり、その表出の様態も異なってくる。一方で、多様な意味合い・象徴やその表出の根底には共通する部分も流れている。それがその要素の本質であり、もしくは本質として見出されたものであろう。

近年、環境問題がクローズアップされ、人と自然の関係性の在り方が盛んに議論されているが、環境歴史学、特に人と自然のかかわり史についての研究を行っていくことの必要性はここにあると考えられる。自然に対して、人が見出した意味合い・象徴は多様でありながら一貫している部分も有しており、それを踏まえなければ自然の扱いを各時代・各空間で適切に選択し行うことは困難であろう。“花”といった要素も例外ではなく、その内には花ごとに異なった、人とのかかわりの歴史が蓄積されており、共通している部分も根底に流れていることを本論文では提示した。これは“場所”のみならず花が関連するもの全てに影響を及ぼすが、その一つとして「花のある場所」を扱う上で一助となればと考えて

いる。

しかし、本論文では花のある場所として江戸の名所を取り上げているため、場所性を語るには限定的である。よって、名所以外の花のある場所も議論する必要があること、また未だに資料が手つかずである都市以外の地域にも目を向け、表立った社会文化史のみならず、地方庶民の社会文化史にも言及していく必要がある。これによって、より多様性と一貫性のそれぞれについて説得力のある考察を行うことが可能となるであろう。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々にお世話になりました。指導教員である辻誠一郎先生には終始粘り強く、鋭くも広い視点での指導をしてくださったことに大変感謝しております。また、副指導教員である大野秀俊先生にはお忙しい中であるにもかかわらず研究の基本的な部分や関心などの大本の部分からご指導くださったことに御礼申し上げます。

東京大学新領域創成科学研究科環境史研究室および文系院生室の皆様や家族には日頃より励まし・助言をいただき、物理的かつ精神的に援助していただくことで本論文を提出することができました。

以上の方々をはじめ多くの方からご指導、ご助言をいただきました。ここに深く感謝の意を表し御礼申し上げます。

2011年1月24日

古市 真美

引用・参考文献

- 足田輝一(1990)：樹の文化誌.朝日新聞社.
- 有岡利幸(1999)：梅Ⅰ. ものとなりの文化史, 法政大学出版局.
- 有岡利幸(1999)：梅Ⅱ. ものとなりの文化史, 法政大学出版局.
- 有岡利幸(2001)：梅干. ものとなりの文化史, 法政大学出版局.
- 有岡利幸(2007)：桜Ⅰ. ものとなりの文化史, 法政大学出版局.
- 有岡利幸(2007)：桜Ⅱ. ものとなりの文化史, 法政大学出版局.
- 有岡利幸(1993)：松と日本人.人文書院.
- 安藤優一郎(2009)：娯楽都市・江戸の誘惑.PHP 研究所.
- 安藤優一郎(2005)：観光都市江戸の誕生.新潮社.
- 上原敬二(1975)：樹木大図説Ⅱ.有明書房.
- 内山節 編(1989)：《森林社会学》宣言.有斐閣.
- 大貫恵美子(2003)：ねじ曲げられた桜—美意識と軍国主義—.岩波書店.
- 岡野祥一・十代田朗・羽生冬佳(2002)：名所本にみる江戸期を通じた近郊名所の変遷に関する研究.ランドスケープ研究, 65(5), pp797-800.
- 岡部佳世(1979)：江戸の屋外レクリエーション空間に関する一考察.日本建築学会論文報告集, 第 279 号, pp153-159.
- 小川和佑(1991)：桜の文学史.朝日新聞社.
- 小川和佑(2000)：日本の桜、歴史の桜.NHK 出版.
- 荻巣樹徳(1997)：絵で見る伝統園芸植物と文化. 柏岡精三.
- 小野佐和子(1993)：江戸時代の都市と行楽.造園雑誌, 57(2), pp143-150.
- 小野佐和子(1992)：江戸の花見.築地書館.
- 小野佐和子(1983)：江戸郊外の遊覧地.造園雑誌, 46(4), pp235-250.
- 小野良平(1988)：飛鳥山にみる名所づくりの思想.造園雑誌, 51(5), pp13-18.

- 川田寿(1995) : 続・江戸名所図会を読む.東京堂出版.
- 川田寿(1993) : 江戸風俗 東都歳事記を読む.東京堂出版.
- 川田寿(1990) : 江戸名所図会を読む.東京堂出版.
- 鬼頭秀一(2006) : 環境倫理における風土性の検討, 千葉大学公共研究, 第 3 巻, 第 2 号, 千葉大学公共研究センター, pp47-60.
- 清藤 鶴美(1971) : 菅家の文華—傑れた叙情詩の古典. 太宰府天満宮文化研究所.
- 久保満佐子・長池卓男(2007) : 山梨県甘利山におけるレンゲツツジ *Rhododendron japonicum* の開花と萌芽の生残に及ぼす要因. 日本緑化工学会誌, 33(2), pp352-358.
- 古泉弘(1999) : 江戸を掘る—近世都市考古学への招待.柏書房.
- 古賀良子・斉藤潮(2003) : 江戸名所図会にみる桜樹の配置形式と景観体験との関連性に関する研究.ランドスケープ研究, 66(5), pp635-640.
- 小木新造・竹内誠・前田愛・陣内秀信・芳賀徹 編(2003) : 江戸東京学事典.三省堂.
- 小林章(1990) : 文化と植物. 養賢堂.
- 小林忠雄・半田賢龍(1999) : 花の文化誌. 雄山閣出版.
- 斎藤正二(2002) : 植物と日本文化.八坂書房.
- 斎藤正二(1980) : 日本人とサクラ.講談社.
- 斎藤正二(1978) : 日本的自然観の研究.上・下巻.
- 桜井満(2008) : 花の民俗学. 講談社.
- 佐々木邦博・平岡直樹(2002) : 『江戸名所記』に見る 17 世紀中頃の江戸の名所の特徴.信州大学農学部紀要, Vol.38, No.1・2, pp37-44.
- 佐竹義輔(1993) : 日本の野生植物.大本 I .平凡社.
- 佐藤俊樹(2005) : 桜が創った「日本」—ソメイヨシノ起源への旅—.岩波書店.
- 白幡洋三郎(2002) : 花見と桜—日本的なるもの再考.PHP 新書.
- 進士五十八(1987) : 品川, 御殿山の生活史的研究.造園雑誌, 50(5), pp24-29.
- 鈴木章生(2001) : 江戸名所と都市文化.吉川弘文館.

- 高久薫・鈴木誠(2007) : 東京向島地域の変遷と地域特性を踏まえたランドスケープ遺産に関する研究. ランドスケープ研究, 70(5), pp355-358.
- 武田久吉(1999) : 民俗と植物.
- 田島美香(1993) : 江戸における名所の立地について : 隅田川を事例に. お茶の水地理, 34, pp59-71.
- 田中修(2009) : 都会の花と木—四季を彩る植物のはなし. 中央公論新社.
- 鳥越皓之(2003) : 花をたずねて吉野山—その歴史とエコロジー—.
- 鳥越皓之編(1999) : 景観の創造—民俗学からのアプローチ. 講座 人間と環境. 昭和堂.
- 寺井泰明(2000) : 花と木の漢字学. 大修館書店.
- 寺沢薫(1986) : 「弥生時代の食料, 畑作物」『季刊考古学』第 14 号, 雄山閣, pp23-31.
- 寺沢薫・寺沢知子(1981) : 『弥生時代植物質食料の基礎的研究』
- 刀根令子・及川清昭・浅見泰司(2003) : 東京における寺社境内の形態の特性に関する分析. 学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題, pp243-244.
- 中尾佐助(2005) : 景観と花文化. 北海道大学図書刊行会.
- 中尾佐助(1986) : 花と木の文化史. 岩波書店.
- 西山松之助 編(1972) : 江戸町人の研究. 全 6 巻. 吉川弘文館.
- 西山松之助(2006) : 江戸文化誌. 岩波書店.
- 羽生美佳・岡野祥一(2003) : 江戸の伝統的名所の特性と明治以降戦前までの名所としての価値の変遷に関する研究. ランドスケープ研究, 66(5), pp457-460.
- 原信田実(2007) : 謎解き 広重「江戸百」. 集英社.
- 樋口忠彦(1985) : 江戸の四季の名所について.
- 樋口忠彦(1993) : 日本の景観—ふるさとの元型. 筑摩書房.
- 飛田範夫(2008) : 江戸の植木屋と花屋—柳沢信鴻著『遊宴日記』より—. 長岡造形大学研究紀要, 5, pp41-48.
- 飛田範夫(2005) : 外来植物と日本庭園. ランドスケープ研究, 68(4), pp284-289.

- 飛田範夫(2004)：日本庭園の植栽史. ランドスケープ研究, 68(1), pp44-51.
- 飛田範夫(2002)：日本庭園の植栽史. 京都大学学術出版会.
- 飛田範夫(2001)：古代・中世の庭園と園芸との関連. ランドスケープ研究, 65(1), pp7-12.
- 飛田範夫(2000)：大阪の植木屋と花屋. ランドスケープ研究, 63(5), pp357-388.
- 飛田範夫(1998)：江戸時代までの花壇についての史的考察. ランドスケープ研究, 61(5), pp385-388.
- 飛田範夫(1997)：庭園植栽の禁忌. ランドスケープ研究, 60(5), pp391-394.
- 平野恵(2006)：十九世紀日本の園芸文化—江戸と東京、植木屋の周辺—. 思文閣出版.
- 福田万里子(2001)：菅原道真公 花の歳時記. 太宰府天満宮文化研究所.
- 堀晃明(2000)：ここが広重・画「東京百景」. 小学館.
- 牧野和春(2002)：新・桜の精神史. 中公叢書.
- 南木睦彦・粉川昭平 (1990)：「伊木力遺跡の大型植物化石群集」『伊木力遺跡』, 多良見町教育委員会, pp642-659.
- 三好学(1938)：桜. 富山房.
- 山田孝雄(1990)：櫻史. 講談社学術文庫.
- 湯浅浩史(1993)：植物と行事—その由来を推理する. 朝日新聞社.
- 湯浅浩史(2004)：植物ごよみ. 朝日新聞社.
- 横山重・市古夏生(1977)：江戸名所記. 勉誠社.
- 朝倉治彦(1970)：江戸鹿子. すみや書房.
- 小池章太郎(1976)：江戸砂子. 東京堂出版.
- 市古夏生・鈴木健一(2001)：江戸名所花暦. 筑摩書房.
- 原田幹(1919-1920)：江戸名所図会. 大日本名所圖會刊行會.
- 朝倉治彦(1970-1972)：東都歳事記. 平凡社.
- 魚屋栄吉・高橋誠一郎(1971)：名所江戸百景. 複製版. 共同通信社開発局.

大島建彦(1995)：遊歴雑記. 三弥井書店.

都立学校遺跡調査団(1997)：駒込鰻縄手御先手組屋敷：都立向丘高校地点における埋蔵文化財発掘調査報告書.都内遺跡調査会.

文京区遺跡調査会(2004)：駒込鰻縄手遺跡第 II 地点：集合住宅建設に伴う発掘調査報告書. 文京区遺跡調査会.

村上博了(1974)：増上寺史.増上寺

亀戸天神社菅公御神忌 1075 年大祭事務局(1977)：亀戸天満宮史料集.

湯島神社(1978)：湯島天神誌.

前島康彦(1981)：向島百花園.郷学舎.

北区飛鳥山博物館(2008)：名所の誕生—飛鳥山で読み解く名所プロデュース：開館記念 10 周年記念企画展図録. 北区教育委員会.

東京市牛込区(1930)：牛込区史.

東京都足立区役所(1967)：新修足立区史.

東京都荒川区(1955)：荒川区史.

東京都江戸川区(1976)：江戸川区史.

東京都大田区(1951)：大田区史.

東京都北区(1971)：北区史.

東京都江東区(1997)：江東区史.江東区.

東京都墨田区(1981)：墨田区史.墨田区.

東京都墨田区(1976)：品川区史.

東京都渋谷区(1966)：渋谷区史.

東京都新宿区(1998)：新宿区史.

東京都世田谷区(1962)：世田谷区史.

東京都台東区(1997) : 台東区.

東京都中央区(1958) : 中央区史.

東京都千代田区(1998) : 千代田区史.

東京都豊島区(1974) : 豊島区史.

東京都文京区(1967) : 文京区史.

東京都港区(1979) : 港区史.

東京都目黒区(1970) : 目黒区史.

東京都四谷区(1985) : 四谷区史.

小金井市史編さん委員会(2009) : 小金井市史.

所沢市史編纂委員会(1957) : 所沢市史.

新座市教育委員会市史編さん室(1984) : 新座市史.

川崎市(1997) : 川崎市史.

横浜市(1958) : 横浜市史.

桜の名所の魅力要素(江戸市中)

名所名	行事		物				自然	商業	眺望	群集	門前	名物
	祭礼	市	堂・祠・社等	仏像・什器等	その他							
真叡山寛永寺			21	2	9	2	1		○			
花屋鋪												
神田明神	2						1	○	○			
新吉原	2						2					
金龍山浅草寺	7	2	13	12	10	2	2		○			○
長耀山感心寺					1	2						
慈雲山瑞輪寺												
日暮里							1	1				
宝珠山延命院												
無量山伝道院			9		1	1						
願訪山吉祥寺						1						
神齡山護国寺			2	4	2	1						
正念寺												
天沢山竜光寺												
花溪山道栄寺												
根津権現	1		1			1	1	1		○		
白山神社	1						1					○
北野神社				2			1					
渋谷八幡宮	1		4	4		2	2					
三縁山増上寺	5		14	2	9	4						
長青山寶樹寺梅窓院			2	2	1	2						
百螺山鳳閣密寺	2			2		1			○			
木下侯庭中												
慈限山光林寺												
鶴亀山誓閑寺			1			1						
富岡八幡宮	2		2		1	1	1	1	○	○		○
鬼子母神堂	2	12		3	3		2	2	1	○		○
天恩山五百羅漢寺			3		1	2						

梅の名所の魅力要素(江戸市中)

名所名	行事		物				自然	商業	眺望	群集	門前	名物
	祭礼	市	堂・祠・社等	仏像・什器等	その他							
梅林坂						1						
茅野天満宮(増上寺内)				1								
飯倉天満宮(増上寺内)						1						
宇米茶屋							1?					
麻布竜土組屋鋪												
湯島天神			1			1		1	○		○	
駒込鱧縄手												
雲居山宗参寺												
金毘羅大権現社												

桜・梅の名所の魅力要素(江戸近郊)

(上：桜 下：梅)

名所名	行事		物		自然		商業	眺望	群集	門前	名物
	祭礼	市	堂・祠・社等	仏像・什器等	その他	自然					
飛鳥山							2	1			
王子権現	1		4		3		4	○			
岸福荷社	1							1	○		
松橋弁財天社							3	○			
陣田川堤							6				
梅柳山木母寺						1					
水神社											
元八幡宮(富賀岡八幡宮)											
御殿山							6	○			
海賞山薬福寺				1			3				
柴松山西光寺					1		2				
大井山弘福寺						1	1				
鹿嶋大明神社				1			1				
妙法山法華寺				1			3				
豊沙門堂						1	2	○			
高田七面堂				2			1				
福聚山常口寺											
医光山円照寺							1				

名所名	行事		物		自然		商業	眺望	群集	門前	名物
	祭礼	市	堂・祠・社等	仏像・什器等	その他	自然					
亀戸梅屋敷							1				
亀戸天満宮		12		7		2	2				
御藏社		1							○		
百花園											

桜・梅の名所の魅力要素(江戸遠隔地)

(上:桜 下:梅)

名所名	行事		物				自然	商業	眺望	群集	門前	名物
	祭礼	市	堂・祠・社等	仏像・什器等	その他							
大湫山豪徳寺			2	1	5	1						
宮坂八幡宮	1		1	1		1						
小金井橋						2		1				
松亀山泉谷寺				1		1						
淡島明神社		2				1						
松本山廣福寺			1			1						
金鳳山平林禅寺			5	2	3	1						
金澤山称名寺			3	6	5	9						
北野天神社		3				2						

名所名	行事		物				自然	商業	眺望	群集	門前	名物
	祭礼	市	堂・祠・社等	仏像・什器等	その他							
大湫山豪徳寺			2	1	5	1						
宮坂八幡宮	1		1	1		1						
小金井橋						2		1				
松亀山泉谷寺				1		1						
淡島明神社		2				1						
松本山廣福寺			1			1						
金鳳山平林禅寺			5	2	3	1						
金澤山称名寺			3	6	5	9						
北野天神社		3				2						

桜・梅の社会文化史

—近世江戸の花の名所に着目して—

Study on Socio-Cultural History of cherry blossom and ume blossom
-Focusing on showplaces of flower around Edo city of the Edo-period-

学籍番号 096771
氏名 古市 真美 (Furuichi, Mami)
指導教員 辻 誠一郎 教授

1. はじめに

1.1 研究の背景

近年、都市やそこにおける人々を支えるものとして、都市生態系が注目されている。ここでの都市生態系とは、「都市やそれに関わる地域を舞台とした生態系」を指し、人の活動も含んでいる。そして、その都市生態系の1つの装置として「花のある場所」がある。これには例えば桜のある上野公園、梅のある湯島天神が挙げられ、レクリエーション機能等の重要な役割を果たしている。

よって、造園学や生態学など様々な観点で研究が行われているが、場所性にとって重要な要素である花の種類に注目して論じたものは少ない。花は自然的存在のみならず社会的存在でもあり、様々な社会文化的要素との関連の蓄積を有する歴史的産物である。したがって各花で関連してきた、また関連している社会文化的要素(以下、関連要素)が異なるため、花が場所性に及ぼす影響は異なると考えられる。しかし、こういった観点からの研究は見られない。これらより、関連要素との関わりの歴史を社会文化史と定義し、社会文化史の視点から花の歴史の実態を捉え、それが場所性に影響することの実証、どのように影響するかの把握が必要と考えられる。

1.2 研究の目的

本研究では、①花を社会文化史から捉え、花の歴史の実態を整理すること②それが花のある場所

に関連することを実証し、どのように関連するかを考察することを目的とする。

2. 研究の対象と方法

2.1 研究の対象

対象の花は、「春來を告げる花木」として、花文化・園芸において代表的な2種とされてきた桜・梅とする。対象地・対象時代としては、代表的都市東京の基盤である近世江戸を取り上げる。近世江戸は花文化が大衆化した時代であり、花のある場所の成立や大衆化の時点を対象とできると考えられる。また、花のある場所として多くの都市住民に関わるという理由から花の名所を取り上げる。

2.2 研究の方法

まず、社会的存在として桜・梅を扱う既往研究・文献を整理し、その中で社会文化史の位置づけを明らかにする。次に、文献調査によって各花の歴史を社会文化史という視点で捉え直して整理し、花の歴史の実態を把握する。そして最後に、近世江戸の花の名所において、各花の名所の実態を把握・比較し、花の歴史の実態との関連を考察する。

3. 社会的存在としての桜・梅の研究

桜においては様々な文献があり、概説書、庭園文化・花見の文化を論じたもの、軍国主義との関連やソメイヨシノを論じたもの等が挙げられるが、桜の歴史全般に関するものを羅列したものにすぎない、領域・時代が限定的といった特徴がある。

梅においては文献が少なく、概説書や菅原道真

に関するもの等があるが、桜と同様に歴史全般に関することを羅列したものにすぎない、分野が限定的といった特徴がある。

しかし、花の歴史の実態は各方面から通史的に蓄積されていくため、その特徴を把握するにはより全般的な見方が必要である。よって、本研究では社会文化的要素と花の扱いとの関わりを全般的・通史的に整理し、花の歴史の実態を考察する。

4. 社会文化史からの整理

4.1 桜

関連要素と扱いの関わりを経緯の主流は以下である。基層に「山にあるもの」としての意義があることから山の神・生命力・稲と繋がり、やがて修験道の聖地である吉野山と結びついて、それが政治的聖地となることを通して政治的権力の象徴となった。その結果、都市に広まり主に貴族によって豪華な花見の宴が行われ、富・権威のシンボルとしての価値や審美的価値に重きをおいた貴族・都市の花となった。そしてそれ以降は王朝文化への憧れから、各階層・地域に桜の扱いが伝播した。

一方で、花祭りを行う浄土宗等の仏教、鎮花祭を行う悪霊や疫神を鎮める神社、農耕儀礼(豊作の予祝、山行きなど)との関連も有し続け、古くからの生命力の象徴としての扱いも続いており、これが富・権威や美の象徴としての桜に影響を及ぼし続けている。以上が桜の歴史の実態である。

4.2 梅

関連要素と扱いの関わりを経緯は以下の通りである。基層に中国から流入した「栽培植物」としての意義があり、それにより武の氏である大伴氏と関連し中国から梅花を見る文化(雅という思考)が流入した。その後庭園文化の流入や、中国文化を好む風潮から宴・花見に取り入れられた。そして中国から流入した学問の象徴・禅における悟りの象徴等が日本に根付き、更に貴族文化へと取り

込まれ、貴族文化への憧れから、各階層・地域にそういった梅の扱いが伝播した。ただし桜に比べて特に趣味のある人に多かった。一方、果樹・禅での利用は依然行われていた。

このように、中国から流入する梅観を中心とした実用・禅などに関わる質素な梅観と、日本の貴族文化において美や雅として取り扱われる華美な梅観の2つの潮流があり、中国から絶えず前者が流入し、それが後者へと影響または吸収されていくといえる。以上が梅の歴史の実態である。

4.3 各花の歴史の実態に関する考察

このように各花は多様に扱われるが、桜は華美な花観が肥大し、梅は華美と質素の2つの潮流があるというように、実際的な実態に差が見られた。

この背景には各花に通底するものが存在すると考えられる。桜は基層に「山にあるもの」という意義があり、それから波及する要素は公的・権威的・開放的であり、偉大で遠くにあるものを愛でるものに占められる。例えば浄土宗は極楽浄土に転生するため念仏を唱えるものであり、間口が広く、庭園は記号が多い。桜は「山にあるもの」という本性を有し、それに伴い公的・権威的・開放的な社会文化的要素と関連しやすいと考えられる。

一方梅は基層に「栽培植物」という意義があり、それから波及する要素は私的・内的・閉鎖的であり、限られた抽象的なものへ向かうものに占められる。例えば禅の思想は、坐禅により意識を内奥に向け自己の本性に立ち返ることを目指すものである。庭園はゼロ記号を目指す。このように、梅は「栽培植物」という本性を有し、それに伴い私的・内的・閉鎖的な社会文化的要素と関連しやすいと考えられる。

これらが実際的な実態やすみわけを生じさせていると考えられる。

5. 近世江戸における花の名所

5.1 名所の抽出

花文化・名所が栄えた近世後期の代表的な名所案内記である『江戸名所図会』『江戸名所花暦』から、桜 57ヶ所、梅 20ヶ所抽出した。

5.2 名所の立地区分

江戸の名所は城からの距離で様態が異なることから、市中・近郊・遠隔地の3つに立地を区分し、地誌・縁起等の文献や絵図より各花の名所の属性・魅力要素・花の扱いを見ていくこととした。区分の定義は、市中を墨引内、近郊を墨引外かつ朱引周辺内、遠隔地を朱引から離れた名所とした。

また、魅力要素としては『江戸名所図会』の記述を表1のように分類し、記述数を集計した。

表1 魅力要素概要

魅力要素	概要
物	堂・祠・社、仏像・什器など
行事	祭礼・市など
自然	植物・石など
商業	商業施設など
眺望	名所からの眺め
群集	人々の群集する様子
門前	門前の賑わいの様子
名物	料理・土産など

5.3 桜・梅間の比較—江戸市中の花の名所

各花の名所の概要を表2に表す。これより、桜には権威のある寺社が多く、魅力要素が多様であることから、総合遊覧地の中心となっている所が多いことが考えられた。一方梅には摂社・旧地など付属的な所が多く、総合遊覧地の一部として含まれるという位置づけの所が多いと考えられた。

この元となるものとして、桜では植栽背景に「吉野山の模倣」「寄付」「遊園整備」「庭木利用」等があり、花への関連要素に「王朝文化」「権威」「庭園文化」等が認められた。一方梅では植栽背景に「天神の神木」「庭木利用」等があり、花への関連要素に「天神」「庭園文化」が認められた。これらより、江戸幕府の都市政策によって、土地や寺社

地が大半を占める市中では、権威・王朝文化・宗教的な要素が関連しやすかったと考えられる。

表2 江戸市中の花の名所概要

	桜	梅
属性	寺社	寺社(天神が多い)
	寺社(名木)	寺社(名木)
	武家屋敷(上級)	武家屋敷(下級)
	遊廊	茶屋
魅力要素 (概観)	物、行事、自然など各々が 多様	自然を重視
	花の扱い (概観)	多い本数 広がりのある植栽 景色・背景として楽しむ

表3 江戸近郊の花の名所概要

	桜	梅
属性	寺社	寺社(天神が多い)
	寺社(名木)	商人の庭園
	高台、川	
魅力要素	物、行事、自然など多様な 所が一地域に集合	物、行事、自然など多様な 所が一地域に集合
	花の扱い	多い本数 広がりのある植栽 景色・背景として楽しむ

表4 江戸遠隔地の花の名所概要

	桜	梅
属性	寺社(名木)	寺社(名木)
	川	村
魅力要素 (概観)	物、行事、権威など多様	自然が主
花の扱い (概観)	少ない本数 花を楽しむ	少ない本数 囲われた植栽 花・実を楽しむ

5.4 桜・梅間の比較—江戸近郊の花の名所

各花の名所の概要を表3に表す。これより、桜・梅共に魅力要素は名所により多様で、王子・品川など遊覧地が集合する地域に含まれるものが多く、それらが集合して総合遊覧地を形成していると考えられた。しかし、梅は桜に比べて徳川縁が薄い名所が多く、眺望がなく小規模な所となっている。

この元となるものとして、桜では植栽背景に「遊園整備」「灌仏会のための植栽」等があり、花への関連要素に行楽化された「貴族文化」「仏教」が認められた。一方梅では植栽背景に「天神の神木」「庭木利用」「梅見の販売」があり、花への関連要素に「天神」「庭園文化」「栽培」が認められた。これらより、近郊は町人・農民が居住する都市と農村の境界であり、近世中後期に自然との接触を重視した新しい総合的な遊覧地が多く整備されたことから、行楽化された王朝文化や灌仏会と関わる仏教、商人の庭園が関連しやすかったと考えられる。

5.5 桜・梅間の比較—江戸遠隔地の花の名所

各花の名所の概要を表4に表す。これより、桜では魅力要素が多様なことから、権威・利益などを求めて多数の一般民衆も訪れたと考えられる。一方梅では「自然」が主な魅力要素であり、遠隔地へ自然を觀賞するのは特別に興味人に限られたことから、訪れた民衆は限られたと考えられる。

この元となるものとして、桜では植栽背景に「偉人による又は偉人のための植栽」「堤の補強」「水毒の浄化」があり、花への関連要素に「実用」が認められた。一方梅では植栽背景に「偉人による又は偉人のための植栽」「天神の神木」「梅実利用」があり、花への関連要素に「天神」「栽培」が認められた。また、桜・梅共に名木としての役割があった。遠隔地は行楽の文化が成長するにつれて名所として目を向けられ始めた、農村や鎌倉時代の古刹からなる地であることから、名木や農業としての花が扱われやすかったと考えられる。

5.6 名所の在り方と花の歴史の実態との関連

以上のように、各花で名所の在り方に差がみられた。全体として見られるのは、桜では①多様な魅力要素②多様な人々の来訪③景色・背景としての楽しみ、梅では①限られた魅力要素②特別に興味の有る人の来訪③花・実の楽しみ、である。この背景には、「山にあるもの」という本性を有する公的・権威的・開放的な桜と、「栽培植物」という本性を有する私的・内的・閉鎖的な梅といった歴史的に通底する対比が見て取れる。実際に山や栽培との関わりが各花の名所に直接表出している。

そして、それは地域としての特徴や名所の特徴の違いから、現れる関連要素の違いに通じて立地区分によって異なった形で表れ、名所のあり方や区分内のすみわけに繋がっていくと考えられる。桜・梅共に、華やかな花観と関わる要素が市中に多く、それ以外の部分が近郊・遠隔地に多かった。

6. 結論と展望

以上のように、歴史の実態が名所の場所性に関連することとその内容を考察できた。各花は様々な要素と関連し姿を変えるが、通底する性質があり、それは花がある場所の場所性にも否応なく現れてくると考えられる。具体的には、桜は「山にあるもの」という本性を有し公的・権威的・開放的な象徴として、一方梅は「栽培植物」という本性を有し私的・内的・閉鎖的な象徴として、そういった場所性を名所に与えた。現代の花のある場所も同様にそれが現れていると考えられる。

人が自然に見出してきた意味合いは多様でありながら一貫した部分も有しており、それを把握することは各時代・各空間で自然の扱いを適切に選択する基盤となるであろう。人と自然のかかわり史の意義はここにあると考えられる。

<主要参考文献>

斎藤 月岑(1834-1836)：江戸名所図会。

岡山鳥(1827)：江戸名所花暦。